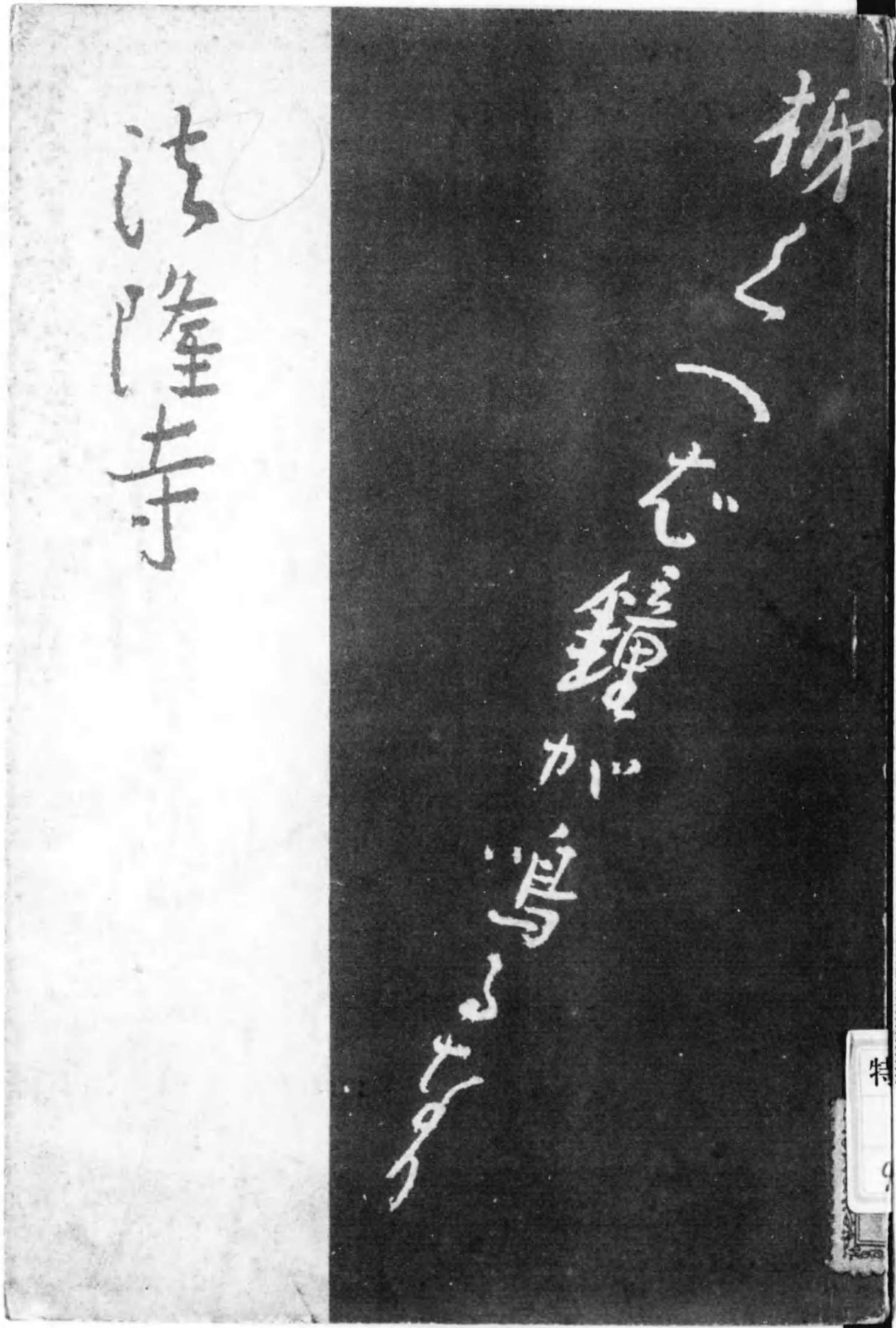


始



法隆寺

柳

く

む

鐘

カ

海

カ

特

特231
955



新
井
和
臣



目次

飛鳥建築とその内容

はしがき……………一

謎の寺……………四

一、再建論と非再建論……………五

二、伽藍構成の特殊性……………一六

三、雲斗雲肘木の怪奇相……………二二

四、高麗尺使用の問題……………三〇

古建築鑑賞……………三四

一、安定感のいはれ……………三五

二、眞反り……………三六

三、エンタシス(膨み)……………三八

諸堂拜觀……………四四

一、中門・廻廊……………四五

二、金堂……………五一

三、塔婆……………六八

自餘の諸建築とそれらの内容

はしがき……………一

西院……………六

大講堂……………七

鐘樓・經樓……………八

聖靈院東室……………一〇

三經院西室……………一二

南大門……………一四

食堂・細殿……………一四

綱封藏……………一六

東院……………二五
東大門……………二三
護摩堂……………二三
新圓堂……………一九
地藏堂……………一八
上御堂……………一六

夢殿……………二七

禮堂……………三一

繪殿・舍利殿……………三二

廻廊……………三四

傳法堂……………三五

鐘樓……………三六

南門……………三七

西門……………三七

目次

北室院本堂……………三八

北室院唐門……………三九

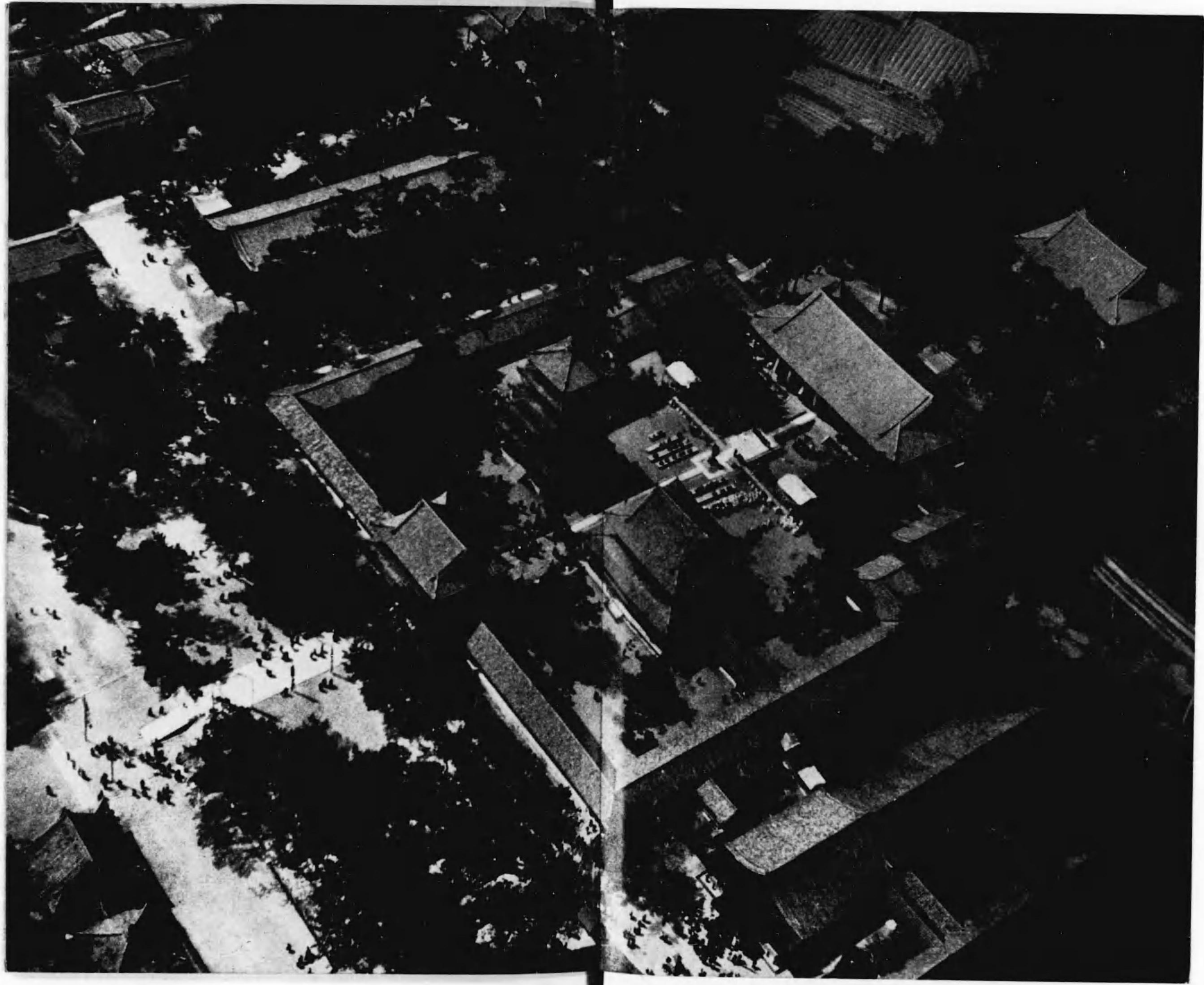
宗源寺四脚門……………三九

附 錄

一、中宮寺の由來……………一

二、本尊如意輪觀世音像……………三

三、天壽國繡帳殘片……………六



飛鳥建築とその内容

はしがき

私が大和に來住してから約十二年になる。その間に法隆寺をおとづれたことは一百回を超して幾十回といふことにならうと思ふ。その中には私自身の研究のための訪問も少くないが、その多くは法隆寺參詣の人達を案内して出向いたのであつた。

この數おほい法隆寺案内のために、參詣者達の希望や要求もわかり、それと共にそれらの人達を満足させるには如何なる指導法を採るべきか——といふ方針を立てることが出来るやうになつた。そしてその方針を立てるに就て、第一に考慮すべきは『時間の制約』であることに氣がついた。

法隆寺に參詣する人達は一體どの位の時間をそれに費すことを豫定してゐるであらう？ もとより人個々の意向は區々であるが、私の經驗からいへば、團體旅行者又は特殊の研究者は別として、大體に於て三時間乃至四時間を豫定してゐると考へてよい。そこでこの見當で人を案内するとなれば、二十七棟の國寶建造物と二百餘點を算する國寶指定の佛像、經卷、什器等を有する法隆寺全般に亘り案内網を張るべくもないことは喋々を要すまい。さらば時間の制約を重んじて、これを如何

なる範圍に限定すればよいか。

(一) 西院と呼ばれる法隆寺本體から、東院の稱ある上宮王院を一順満遍に拜觀すること

(二) 法隆寺本體——殊に法隆寺ならずしては、他に見ることの出来ない所謂『飛鳥建築』の

一廓を熟察するに努め、他は時間の許す範圍に於て巡歴すること

まづ以上の二途であらうと思ふ。そして私が案内者として採らんとする方途は後者に屬することを茲に明言する。要するに、法隆寺には他に比類を見ない『飛鳥建築』なるものがあつて、これを見過すか、又は軽く見るのであつたら、それは『法隆寺に來た甲斐がない』といつても過言ではない。他の諸建築物や什寶は貴重なる存在たるに相違ないが、さすがは大和である、法隆寺以外に於ていくらもそれらの類品を見ることが出来る。然るに飛鳥建築とそれの有つ内容品とに至つては、我國に比類するものないばかりでなく、これら佛教文化の先進國であつた支那、朝鮮に於ても見出すことの出来ない唯一無二の遺構遺品に屬し、仍て以て我日本帝國のために絶大の氣を吐いてゐるものである。

以上の見解から、私は法隆寺案内を上述の(二)の方針に依ることに定めてゐる。従つて本冊も一般參詣者を指導するといふ建前に於て、この趣旨に基いて書かうとするのである。

それにつけてもこの寺は、最古の存在であるだけに、問題の多い寺であり、又古建築鑑賞に關して規範とすべき多くの構造様式を保存してゐる。従つて諸堂拜觀に先立ち、問題となるべきものや鑑賞の要領に就て豫め了知しておく必要があるから、先づそれらの説明より始めることにしよう。

謎の寺

四

古いお寺は、その素性は判つても、その來歴は大抵判明しないのを常とする。いづれも寺傳又は縁起といふものを以て説明の資料としてゐるが、それが又怪しいものが多く、かの伊勢貞丈をして『諸寺縁起といふもの妄説多し、悉く信じ難し』と言はしめた程である。

法隆寺が現存する我國最古の寺たりといふ點に於て、その經過年數の多いだけに、判明しないことが多々あり、それが謎となつて容易に解明されないものである。さり乍ら流石に名刹である。その『謎』なるものも、世に有りふれた『何々七不思議』といふやうなものでなく、左に掲ぐるるとき堂々たるものである。

- 一、再建論と非再建論
- 二、伽藍構成の特殊性
- 三、雲斗雲肘木の怪奇相
- 四、高麗尺使用の問題

以下にその各個に就て卑見を述べてみよう。

一、再建論と非再建論

この論争は、法隆寺の謎のうちでも最も大なるもので、又有名なものであるから、第一にこれを採りあげる。

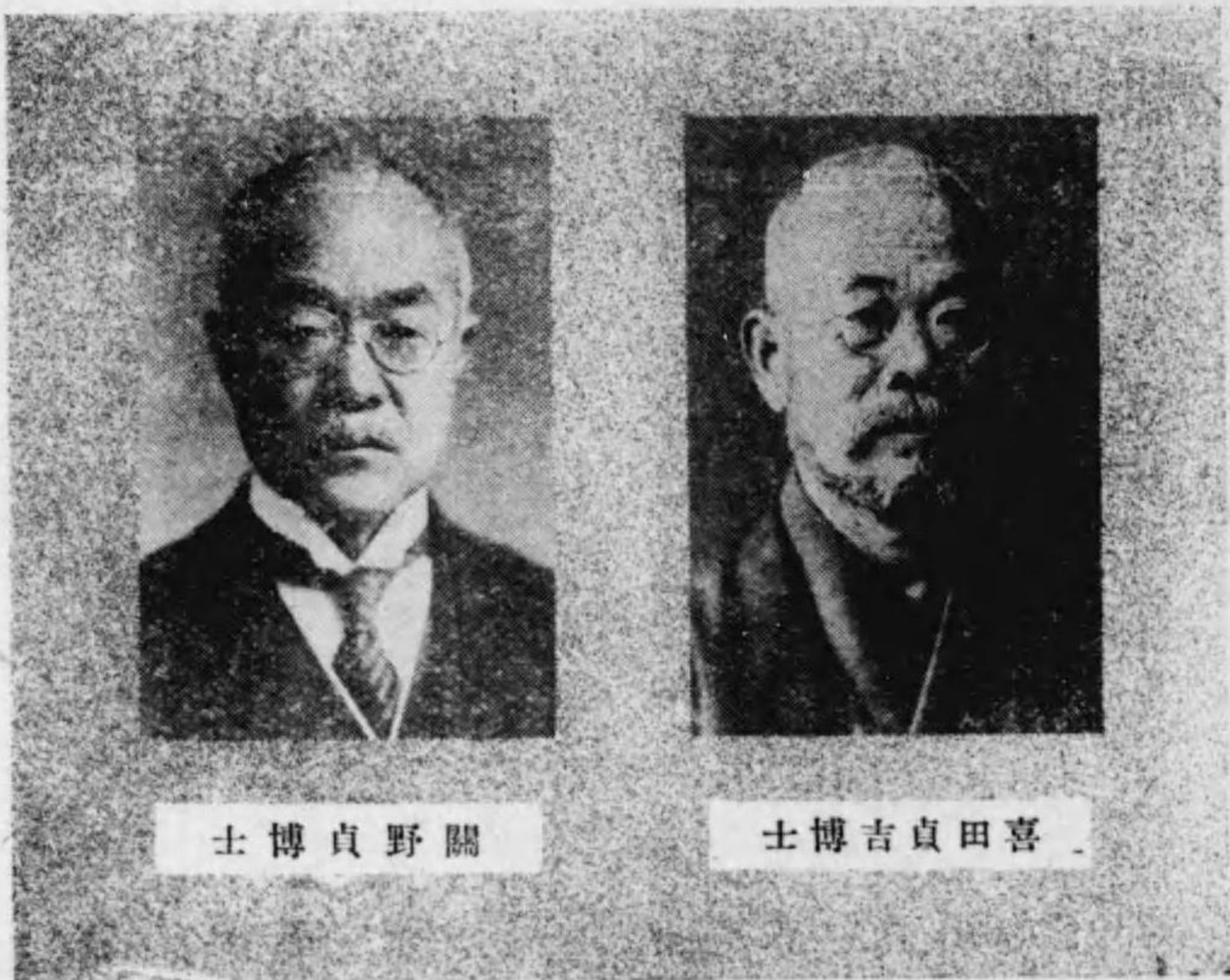
法隆寺に關する最も古く且信據すべき記録は、日本書紀天智天皇即位九年四月の條に法隆寺に災ひつけり一屋餘すなし

と載せてあるのが初見である。已に焼けたとあるからには、それが建立されてゐたことは自明の理であるが、その記事は日本書紀の何處を探しても見當らない。しかも焼けた寺の名を負ふ建築物は、今も堂々たる伽藍構成を保全してその存在を繼續してゐるのであるから、焼けたが更に再建されたと考へることは決して間違でないであらう。然るにその再建の記事が又日本書紀の何處にも載せられてゐない。こゝに謎が潜んでゐるのであつて、それが再建、非再建の兩説に立ちわかれ、三十餘年の長きに亘つて論争をつゞけ、今なほ妥結を見るに至らない状態である。

寺傳では、聖德太子御創建以來この伽藍が一度の火災にも會はずして今日に至つた——といふこ

六
とになつてゐる。鎌倉時代に出た『古今目録抄』にもそれを定説として記載してゐるから、同時代には已に寺傳は確立して誰も疑をさしはさむものがなかつた。しかし明治の御代となり、史的考證が盛行することになつて、正史(日本書紀)に載せた法隆寺焼亡の記事に着眼し、現在の伽藍は再建であると言ひ出すやうになつて來た。黒川眞頼博士の如きは現にその提唱者の一人であつた。そしてそれが論争を起すに至つたのは明治三十八年の春のことで、小杉楡邨博士が歴史家の立場から、正史に明記された『法隆寺に穴けり』の記事を論據に法隆寺再建論を講演されたに對し、偶然にも時を同じくして、關野貞、平子鐸嶺の兩氏が、それ〴〵技術家又は藝術家の立場から、實物考査に基く非再建論を發表され、茲には、しかも再建、非再建の兩論對立して論争するかに見えて風雲急なるを想はしめた。しかし濃厚なる小杉博士はそれ以上に論歩を進められなかつたので、この論争も論争とならず、非再建論に歩を有たせた形で一應の梟がついた。

然るにこの状態に慍らざるものありとして、小杉博士の再建論を繼承して出場したのが喜田貞吉氏であつた。その結果、論争はその本性を發揮して、喜田、關野兩博士を中心とする再建、非再建兩論の間に火花をちらす大論戰が開かれ、爾來三十有餘年に亘つて解けず、以て今日へ持越してゐるのである。これを要するに、再建論は文獻に重點をおき、非再建論は建築様式に立脚するのであ



關野貞博士

喜田貞吉博士

るが、三十餘年といふ長い年月を経過する間には次ぎ〴〵に新手が加つて、種々の觀點から様々の論評を試みたので、それからそれへと幾多の新史實が現はれ來つて、双方の考へ方を變ぜしめることゝもなり、當初の論旨に比しては漸次その趣を異にするまでに至つた點もある。とにかく今日までに發表された關係論文の數は二百餘篇に上るといふことを以てしても如何に論議が非常な熱情を以て行はれたかを察知するに足るであらう。

なほ兩論者の論旨を採録して參考に供したのであるが、到底簡單には扱ひがたく、主旨を盡すにはこの小冊子の堪へ得るところではないから、左に代表的論文數篇を紹介して

讀者箇々の編讀を請ふこととする。

法隆寺建築説	黒川眞頼氏	國華九一十一
法隆寺建築論	伊東忠太氏	考古學會雜誌二卷
同	同	東京帝國大學紀要
大和法隆寺再造説につきての疑	平子鐸嶺氏	新佛教二卷十一號
法隆寺草創考	同	國華一七七號
法隆寺金堂塔婆及中門非再建論	關野貞氏	建築雜誌二二八號
關野平子兩氏の法隆寺非再建論を駁す	喜田貞吉氏	歴史地理七卷五號
法隆寺の罹災を立證して一部の藝術論者の研究方法を疑ふ	同	同
藝術史上飛鳥時代といふ名稱に就て	同	同
法隆寺再建非再建の論争に就て	坪井九馬三氏	同 七卷六號
法隆寺再建非再建論を讀む	久米邦武氏	同
法隆寺論につきて久米先生の再喝を仰ぐ	平子鐸嶺氏	讀賣新聞
天智紀法隆寺焼失説の誤謬	同	史學界七卷六號

法隆寺伽藍主要建造物の非再建に關する記録的論證

喜田氏の法隆寺罹災説を駁して實物研究の辨に及ぶ

飛鳥時代といへる名稱に就て

法隆寺堂塔の建立年代に就て

所謂推古式とは何ぞや(敢て探本博士の評言に答ふ)

平子君の法隆寺非再建論を駁して其單に妄想に過ぎざるを明にす

關野氏の法隆寺非再建に關する最新意見の辨駁

さて現在に於てはこの論争が如何なる状態にあるかといふに、兩論者共に出すだけの種を出しつくしたのであつて、しかも互に相手方を屈服せしむるに至らず、従つて妥結に達せず、まづは睨み合ひの姿勢を持續してゐるといふのであつたが、近年に及んで、足立康博士の『新非再建論』なるものが發表され

(一) 正史の記載を認めて火災焼亡の史實を肯定し

(二) 建築様式を認めて現在の法隆寺(塔婆、金堂、中門の一廓)を飛鳥時代に屬すべきものと

建築雜誌二二二號

歴史地理七卷六一八號

同 七卷七號

宗教界一卷三號

歴史地理七卷七號

同 七卷十二號

宗教界一卷四號

考定す

なる建前の下に再建、非再建の兩論を妥結せしめようといふ推論（臆測）を提出された。これを今少しくはしく説明してみると、足立博士の推論は、從來唱へられてゐた法隆寺二寺説なるものに淵源するものゝ如く

もこの寺域内に用明天皇の御病氣平癒を祈誓するために薬師如来（今の金堂東間の安置佛）を本尊として祀る寺（これが本來の法隆寺で焼亡したもの）と、聖德太子の薨後その冥福を祈願するために釋迦三尊（今の金堂中間の安置佛）を本尊として祀る廟所（今の金堂、塔婆、中門の一廓）との二つがあつた。然るに日本書紀記載の如く法隆寺（本寺）が焼亡し、何かの事情で再建が出来なかつたので、聖德太子の廟所に手を加へて一寺の態様を完成し、これに寺號を繼がせたのが今の法隆寺である。従つて日本書紀の火災焼亡の記事をその儘に認めても、今の法隆寺の飛鳥建築（註）を飛鳥時代の工作なりと推論するに差支なく、從來の再建、非再建の兩論いづれをも包容し得てめでたしめでたしである。

といふことになる。成程、足立博士の推定の如く、それが事實と一致するものであつたなら、双方傷つかずに妥結點に達したものであつて、實にめでたしめでたしであらう。しかし名案のやうであるが事實と推定との一致には若干の距離の存するものあるを想はしめ、未だ一般の支持をうくるに至つてゐない。

【註】 飛鳥建築と飛鳥時代の建築といふ言葉の使用法に就ては後章「諸堂并觀」の部に説明がある。

x

足立博士が新非再建論を發表されるや、再建論の巨頭喜田博士は黙つて居らず、直に足立博士に挑戦した結果、一昨年（昭和十四年）三月東京帝大構内の山上御殿に立會演説を開かれた。同會の顛末に就ては歴史地理の『法隆寺論争』と題する冊子に詳記されてあるから、省略するが、私がその中から引用せんとするのは、舊若草伽藍に關する一節である。

法隆寺境内に『若草伽藍址』と傳へられる場所がある。現地は塔頭普門院を中心とし、北は食堂のあたりへ、南は境内南界築地塀のあたりに互る地區である。食堂邊からは焼土を出し、それに素瓣蓮華文の廢瓦をまじへてゐる。又築地塀に接しては塔の心礎と認められる大礎石があり、それが火にかゝつた爲めか大きな罅が入つてゐる。従つてこのあたり一帯の地が、傳説の如く、若草伽藍の舊址であると認定するに恰好の資料を提供するものである。その結果、近年に至つて、これを日本書紀所載の焼亡せる法隆寺に擬するの説が盛になり、この遺址の眞相を突きとめ得れば、再建、

非再建の論争に寄與するところ多大なるものあるべしとの期待をかけられるに至つた。そこで前述の『法隆寺論争』に徴しても判るやうに、兩論争者もこの點を重視して、その發掘の結果が本論争に何等かの影響を與ふるものとして現地發掘要望の意向を見せてゐる。

然るに奇縁といはうか、不思議といはうか、圖らずもこの若草伽藍の真相の究明に手を着ける時節が到來したのである。

若草伽藍の塔婆の心礎と傳へられる巨石は、前述の如く、南築地塀に接近して古くから放置されてあつたが、明治の初め北畠治房男爵によつて寺外に搬出され、轉々として最後は野村徳七氏の住吉の別邸に庭石として落ちついてゐた。然るに野村氏の篤志によりそれが法隆寺へ返還されることとなり、一昨年(昭和十四年)の秋滞りなく境内の舊地に戻つたのであつた。そこで寺側ではこれを契機として若草伽藍址の現場調査を思ひ立ち、東京帝室博物館鑑査官石田茂作博士にその發掘作業を依頼した。石田博士は喜田、足立兩博士の『法隆寺論争』に際しても、若草伽藍址の發掘を以て論争決定の鍵なりと唱道して居られるから、この依頼に應じ、同年の暮慎重に發掘作業を進められたが、作業は意外なる開展を示し、心礎と稱する巨石のある場所から塔址を、更にその北邊に於て金堂址を掘り當てられた。なほ進んでその北邊を掘れば必ず講堂址が出るであらうとの豫想も立つ

やうになつたが、そこには塔頭普門院と實相院との建物が現在してゐるから、作業を進めがたくて自然中止となつた。

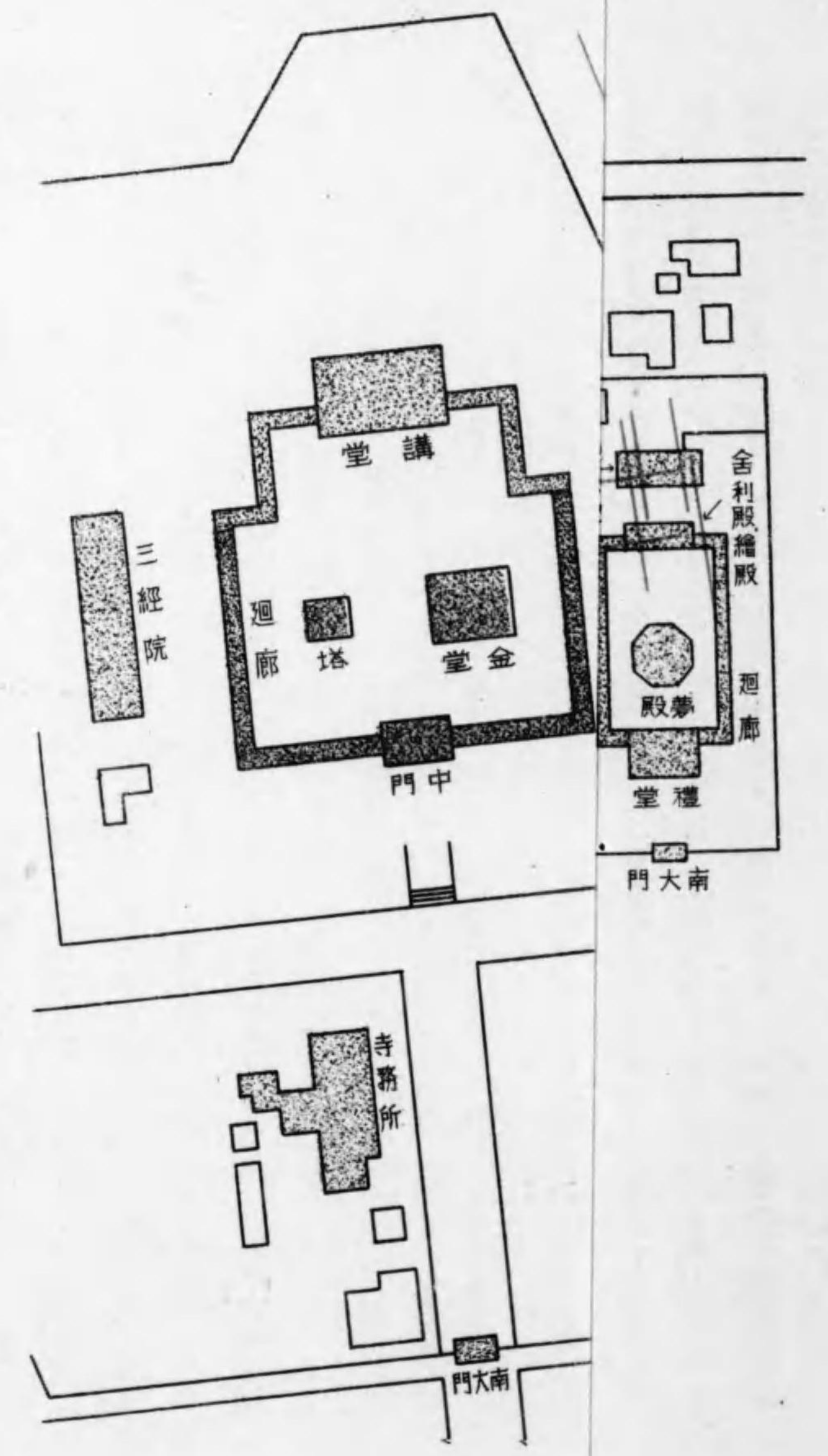
塔婆址及金堂址の基壇面積は、現存する法隆寺のそれと相似するが、その堂宇の配置は、豫想を裏切つて、塔婆を先頭に据ゑ、金堂をその後に置くことに於て全く四天王寺のそれと等しく、その流風の古きことを想はしめる。殊に發掘者を驚かしたのは、塔婆・金堂の中心を南北に貫く一線は南々東に偏倚すること約二十度、この線を北方へ延長すれば現存法隆寺伽藍の東邊を侵すの恐れあるといふ現象を呈してゐることである(詳細は、日本文化の研究『若草伽藍址發掘に就て』を参照されよ)。

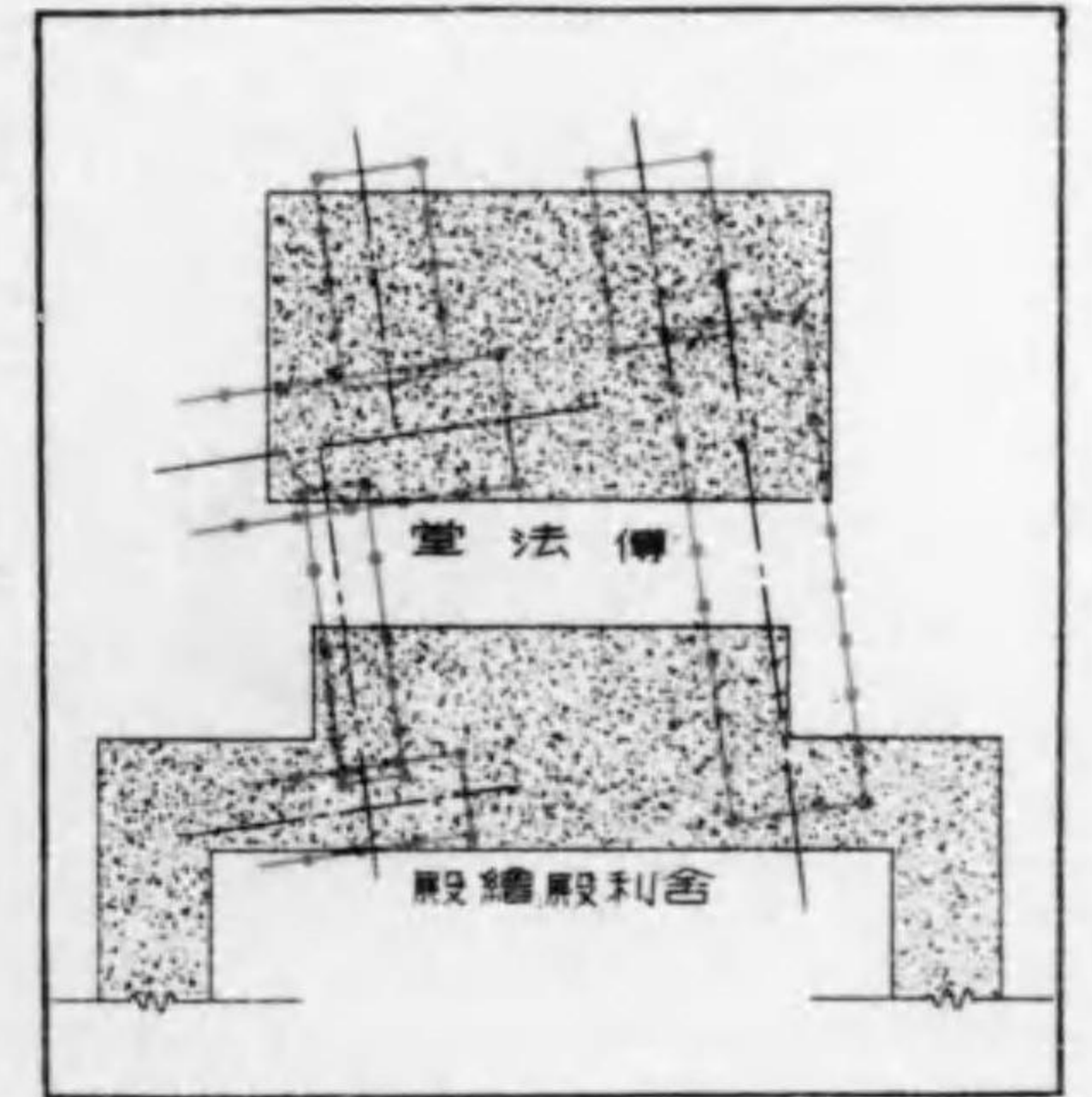
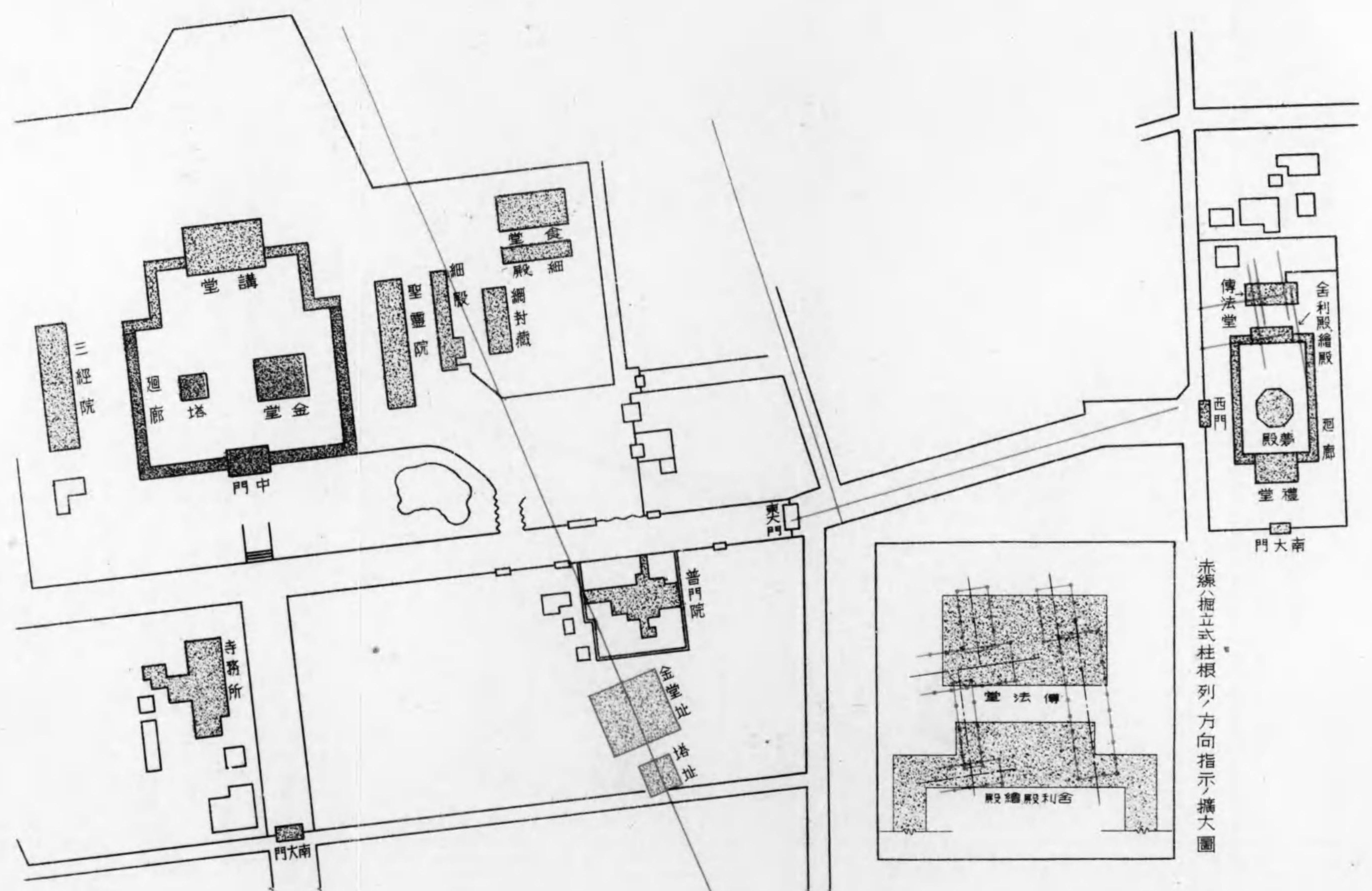
私はこの調査の結果を聞知して、成程、若草伽藍址の發掘調査は『法隆寺論争の鍵』であつて、兩論争者に與ふる影響の至大なることを知つた。それと共に私が今まで變だなどと思ひながら、深く意を留めなかつた東大門北脇の築地塀の南々東に斜走すること、又東大門と東院の西門とをつなぐ道路が東々北に偏することの理由が、この伽藍址の偏倚によつて釋明されたと感じたのである。然るに、折も折とて、東院に於ける保存修理工事の進捗に伴ひ、傳法堂及繪殿・金利殿の建立される以前に、そこに建てられた相當の規模をもつ數棟の建物のあつたことが發見され、しかもそれが掘立

式であつた。そしてその掘立柱の址をたどつてみれば、柱穴の列立する方向がいづれも南々東又は東々北に偏倚することを認められたといふのである。従つてこれらを綜合考察すれば、斑鳩地方の古道は現状のごとき正東又は正南に布かれてはゐなかつた。即ち南々東又は東々北に偏倚するを習ひ(註)としたものであつた。さすれば、現在の道路が正南又は正東に通じてゐるのは條里の制の布かれた後であつて、東大門北脇の築地塀又は東大門・東院間の道路の斜走する如きは、畢竟斑鳩古道(假稱)の片影を残すものと認め得るのである——といふ想定を起すことも可能となつて來た。

【註】 若草伽藍の堂塔の配置や傳法堂地下に存する柱根列の配置によつて、古くこの地方の建物や道路の方向が南々東又は東々北に偏倚してゐることが推定される。但しその理由は「背後に聳ゆる山脉の斜走するに調子を合はせたのでないか」といふ説明の外には、今分誰にも説明が出来ないことを遺憾とする。

さて若草伽藍址の發掘調査はその後完成を告げずして中止の形となり、又傳法堂及繪殿・舍利殿の地下調査も未だ調査中に屬するが故に、當事者の工事報告書が世に出てゐないから、論争決定の材料として未だ『鍵』たる作用を十分に爲すに至らないのは残念であるが、さてこれだけを述べたのでも、若草伽藍址の發掘が再建、非再建の論争に與ふる資料としての力は實に重大であることが判るであらう。





赤線(掘立式柱根列)方向指示、擴大圖

のでも、若草加藍址の發掘が再建、非再建の論争に與ふる資料としての力は實に重大であることが判るであらう。

足立博士の新非再建論は同博士の推斷力の偉大なることを證するものとして大なる敬意を拂はしめるのであるが、それが『非再建』の看板をかゝけて居られる關係上、現在の法隆寺を聖德太子の廟所に始まるとし、これを推古天皇の御代即ち飛鳥時代の建造物として取扱はうとされるのであるから、以上の如き若草伽藍址發掘の結果を見ては、そこに斑鳩古道の制約の下に建つてゐたと思はれる若草伽藍（即ち本來の法隆寺）と、條里制の下に建つてゐる現在の法隆寺（聖德太子の廟所に始まる）とが、或時期に於て相並んで建つてゐたとの想定を困難ならしめ、その反面に於て再建論者の氣勢をあげしめることにならうと思ふが、如何？

x

かくてこの寺はどこまで行つても謎から謎へ轉々するものとも見えようが、決してさうではなくて、次第に解消點へ近づきつゝあることを認められる。幸に若草伽藍址の發掘作業が繼續されて完成し、又一方に諸堂——わけても金堂の保存修理工事修了の日が來たなれば、そしてそれが發表を回避されることがなければ、再建、非再建の謎も自ら解消するのであらうと確信する。

二、伽藍構成の特殊性

法隆寺に詣つて、廻廊内に入つて先づ驚かされるのは伽藍構成の様相の異つてゐることである。即ちこの寺には単一主堂（本堂）のないことである。どこの寺に詣つても門を入れればその正面に主堂（本堂）の聳え立つのを常とする。然るにこの寺にはそれが無い。正面は空虚であつて、左右に塔婆と金堂とが「どちらが偉いか」といふ風に對立してゐる。さういへば、振りかへつて見る中門も、扉は二戸であつて、一戸又は三戸といふ奇數の常則を破つてゐる。従つて正面がない。強いていへば正面は柱である。この奇怪な様相こそ正に謎ではないか、今これに對して聊か卑見を述べて謎が解けるか解けないかを試みよう。

私が初めて法隆寺をおとづれた頃は、法隆寺のこの珍しい伽藍構成が佛教を我國に移し植ゑた先進國即ち支那・朝鮮にも類例となるものを見當らないといふので、これを日本人の創意——逞しい創意に成るものと誇稱して悦に入る人の多かつた時代であつた。甚だしきはこれを聖德太子の御創案に歸して法隆寺の伽藍構成を神聖視すべきものと唱ふる人さへあつた。その頃の私は、まだかういふ方面の事に不案内であつたから、教へられる儘にさういふものかとして徒に驚異の目をみはる

のみであつた。しかし、果してこの伽藍構成の特殊相を左様に誇稱し、又は神聖視すべきものなのであらうか。これに對する識見としては、故濱田青陵博士がこの事に關して言はれた言葉を引用して讀者の參考に供する。

斯かる點にまで國自慢をしたり、太子の叡智を附會するのは私の取らない所である………
今日已に知ることを得ない多數の朝鮮支那の寺院に、同じ様な伽藍の配置が全然なかつたとは誰が云ひ得やう、（夢殿第十卷『塔婆の研究』）

眞に名言である。法隆寺式の伽藍配置の痕跡が支那・朝鮮に見當らないのは事實であるが、實は四天王寺式にしても、藥師寺式にしても、我國のごとき遺構を存するものは支那・朝鮮に一つもなく、遺址でさへも漸く二三の寺址にその片影を残すに過ぎないのである。

x

この問題を究明するに當り『伽藍構成』といふ言葉を説明する必要があると思ふから、一應あとへ戻つてそれを説明しておかう。

伽藍構成といふのは、主要堂宇が適當に配置されてゐる建築群をいふのである。世に呼びならはす『七堂伽藍』といふ言葉はこれと同意義のものである。しかし七堂とは數を意味するのではなく、

むしろ『悉堂』と書く方が適當であらうか——要するに主要堂宇のとり揃うてゐる有様(即ち悉す)を指すのである。そしてその主要堂宇といふのは、一に塔婆、二に金堂、三に講堂、四に食堂、それら堂宇をとりかこむ廻廊及中門といふやうな順序である。そしてこの廻廊にとりかこまれた内部を『内院』と呼ぶのであるが、この内院に包容される堂宇はいつの世にも同じいものではなく、時代によつてよほど違つた形式をとつてゐる。多分最初は主要堂宇全部を包圍したであらうと想像されるのが、最後には金堂一字のみが内院に残ることになつた。これによつて伽藍構成が幾度かの變遷を経たことを認められるであらう。

而して今いふところの伽藍構成なるものは支那に發生したものであつて、佛教の興起した印度に淵源を有つものではない。印度に於ける佛教の伽藍はいつの世にも塔婆中心であつて、今もなほその通りに扱はれてゐる。それで佛教が印度以外の國々に傳はるに及んでも、最初は塔婆を伽藍第一の建造物として崇めてゐた。我國に於ても、伽藍配置の最も古い形式に屬すといはれる四天王寺式の寺院は、中門を入れれば塔婆が内院の先頭に立つて、伽藍第一の建造物たることを示してゐる。これは大に理由あることで、塔婆は釋尊の舍利(遺骨)を納藏する聖所であるから、現身佛として釋迦を尊崇する上から塔婆の重視さるべきは當然のことである。然るに今法隆寺の内院に立つてみれば

そこに塔婆が金堂と對立の位置に建つてゐるのを見出すであらう。さてその理由は如何?

前にも述べた如く、印度の伽藍に在りては塔婆中心たること今も昔も變りはない。しかし印度以外の國々に於ては塔婆の尊崇に幾變遷があり、それにつれて塔婆の位置の動搖することを免れ得なかつた。それもその筈であらう。釋迦は印度人である。印度に生れ、印度で歿し、成道後の六十幾歳といふ長い生涯の全部を國內の遊行に費した人である。印度人が、その教法以外に、釋迦その人に對して有つ愛着感是他國人と比して非常な逕庭が存する。こゝに印度人が舍利(遺骨)を納藏する塔婆に對して特殊の敬意を拂ふことゝの理由を會得することが出来るであらう。

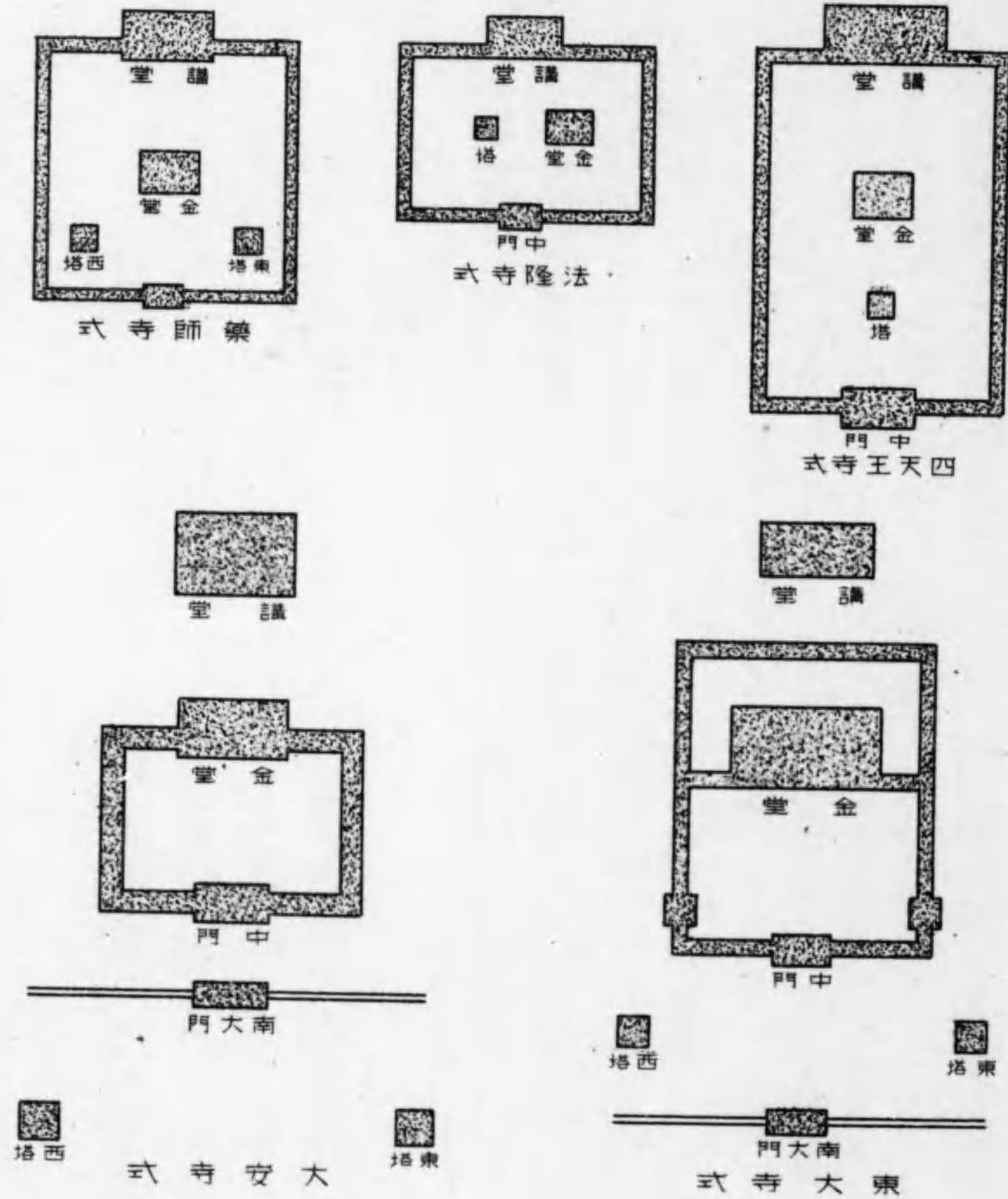
元來他國人が佛教を信奉するに至つたのは、釋迦その人に對する愛着よりもむしろその教法に對する尊崇である。従つて現身を表する釋迦の舍利よりも、法身を表する佛像の方を重視するやうになるのは必然の趨向といふべきであらう。こゝに佛像安置を主體とする金堂の出現を見るに至り、それが次第に勢ひを増して終に伽藍配置に於ける首座を占めるやうになつた——といふ考へ方が起つて來るのを禁じ得ないのである

x

以上は私の想定(考察)に出づるものである。しかし伽藍構成に於ける主要堂宇の動きを熟察する

と、その動き方が私の想定と一致することを確認されるので、この考察も相當價値を有するものたるを自信してゐる。即ち伽藍構成に於ける主要堂宇の動きといふも、堂宇全部が動くのではない。結局塔婆と金堂との競り合ひといふべきか、この兩者の位置が動揺するのである。これを結論からいへば、塔婆は退嬰の一路をたどつたのであるが、これに反して金堂はその位置を次第に高めゆくといふ現象を呈示してゐる。

これを詳説すれば、現在知れてゐる限りに於て、伽藍構成の最初の形式は塔婆を先頭とし、金堂これに次ぐといふのであつた（これを四天王寺式といふ）。我國に於ける最初の寺院は皆この形式をとつてゐたらしい。然るに何時の頃に始まつたか定かでないが、塔婆が金堂と對等の位置に置かれるといふことになつた。これが即ち法隆寺式と稱へられるものである。而してその原態を今のうつつ（現實）に残してゐる點に於て法隆寺の飛鳥建築を偉觀とするのであるが、畢竟これも伽藍構成に於ける一變遷期の形式を示すに過ぎず、故濱田博士も言はれた如く、決して我國自慢に値するものでない。さてその次ぎになると、金堂を伽藍構成の首座に置き、塔婆をその前面の左右に置く（註）といふ形式となつた。しかしこの場合でもこれを内院の域内に置き、廻廊は塔婆・金堂を圍繞して講堂で終つてゐた（これを藤師寺式といふ）。然るにその次ぎに現はれた東大寺式になると、塔婆を



内院の外に置き、金堂一字のみが内院を占有することになった。更に甚だしきは大安寺式であるがこの形式では塔婆を南大門の外に建てたのである。

【註】 塔婆が伽藍構成の第一位に在つたことは造塔の本義に則つたものである。然るにそれが金堂と對峙の位置に立つこととなり、更にそれが金堂の前面に置かれ、しかも左右に配置されて脇侍の形となつたのは、聊か玩弄の氣味あり、塔婆の本質から考へて、甚だ面白くない現象である。

かういふ風に開展しゆく伽藍構成のあとをたどれば、これを要約して『塔婆の顛落』といふことになる。しかも如何なる位置にでも塔婆を存置して居れば、これを主要堂宇の一つと見ることが出来るが、時代の變轉は終に塔婆なき寺院の現出を見るに至つたのである。これは塔婆の歴史的位置から觀て、眞に淋しい悲しい終末であると言はなければならぬ。

x

翻つてこれを考察するに、前に述べた如く、塔婆の心髓となるものは釋尊の舍利である。然るに佛教が諸國に流布するにつれ塔婆の建立盛大となるに及び、これらに安置すべき舍利の缺乏を告げることゝなつた。而してこれを補給する方法は如何様に扱はれたか。本來の舍利即ち釋尊の遺骨は殖ゑるものでないから、不足する場合は、自然代用物を以てこれに充當することは事情餘儀なき

次第であらう。そしてその第一に現はれたのが神聖なる恆河の砂礫であり、これに加持を施して舍利同様と見做したのであつた。爾來どういふ風に開展し往いたかは承知しないが、最後に現はれたものに法舍利がある。これは經文若くは經文の斷片を舍利代用物として塔中に置くのであつて、法隆寺の百萬塔として名高い小木塔に納められてある法舍利は陀羅尼の斷片である。かうなつて來ると、教法（經文）を舍利として拜むよりも、これを具體化し佛像として拜む方が有難味が多いであらうから、塔婆の價値の自から漸減しゆくことは免れ得ない自然の運命であらう。

私はこの角度から法隆寺に於ける『伽藍構成の特殊相』を観察せんとするのであるが、とにかくこの研究に對して偉大なる資料を興ふる法隆寺の遺構に最大の敬意を拂ひたいと思ふ。

三、雲斗雲肘木の怪奇相

法隆寺に詣つて不思議の眼を見はらせるものゝ一つに、『雲斗雲肘木』と呼ばれてゐるものがある。これは建物の軒先を支持するために使用された構架材の一種たるに過ぎないのであるが、その形状が他の建築物の同種用材と全く異つて居り、近時流行する『怪奇』なる言葉がこれに恰當するかと思はれる程に特異の存在となつてゐる。果してしかく怪奇の存在、即ち謎として取扱はるべき

ものであらうか。

我國の寺院建築が支那建築の系統に屬するものたるは論ずるの要なきところ。従つてそれを構成する各種構材の形状様態も支那様式を移入したと考へて宜しいのである。然るにこの寺の雲斗雲肘木に限つては、今日までのところ、その原流として證すべき建築作例を支那は勿論、朝鮮にも見出すことが出来ない。又これに關する文獻の徵すべきものもない。尤も支那は國柄として易姓革命の戰亂勃發する毎に、前代の建築物は一切兵火にかゝつて壊滅に歸するを常とし、今の世に遺存するそれは漸く遼代の遺構即ち九百年前後を経た建物を最古とするのであるから、上古の先例を求め難いことは無理ならぬことと思はれる。従つて學徒をしてその研究の方向を一轉せしめ、石窟、石闕乃至碑面、明器に遺す殘影を涉獵して類例をたづねしめてゐる。しかしその研究の結果は、何れも當て推量の域を彷徨するに過ぎないのであつて、これまた人をして成程と首肯せしめる程の材料を提供するに至らない。こゝに於てか、法隆寺の伽藍構成に對する考察と同じい推斷を提唱し來り、雲斗雲肘木の手法は我國で創められた考案なりと斷じ、これを以て日本民族の優秀性を立證せんとする論者を出すまでに發展した。

雲斗雲肘木の考案が我國で創まつたとして、さてそれが日本民族の創意として誇るべきものなり

や、將又歸化人出身の技術者の工夫に出づるものなりやは別問題として、しかも私はこの手法が我國で創められたと考察する論者に同意致したのである。尤も私の見聞の範圍は頗る狭く、従つて、典據とするところ該博ならず、更に建築技術の上に於ては全然素人であるから、その述ぶるところ獨斷偏見の嫌あるを免れないであらうから、若し私が思ひ違つてゐるのであれば、指教に吝ならずらんことを大方有識に切望しておく。

x

さて雲斗雲肘木の趣向が我國で創められたと考へるに就ての理由を述べてみよう。一般には支那朝鮮にも確乎とした先例の見當らないことを理由として我民族の創意に成ると結論してゐるのであるが、私はさういふ漠たることを根據するのではない。かゝる趣向の發生すべき素因が我國に存するからであると考へたいのである。さらばその『素因』とは何かといへば、端的に答へて『雨』といひたい。こゝに建築の用語としての『和様』の初發を見ると考へる。

私が古建築に就ての研究を始めた頃には、和様わやうといふ言葉の意義は天竺様・唐様たうやうに屬せざるものといふことであつた（今もさういふ風に解してゐる人が少くないらしい）から、隨分茫漠とした言ひあらはし方であると思つた。しか研究を續けるに従つて、左様なものではなく、和様とは日本の

風土並に民族の習性が支那建築に與へた影響を指すものなることが判つた（註）。そしてその先頭に立つて痛烈なる影響を與へたものが雨であつた。

【註】 雨が軒の出を深からしめた如く、邦人座臥の風習が床かをかゝせ、それが拭板敷ぬぐいから畳敷に進み、又それに伴つて廻縁をめぐらし、出入口に木階を設け、これを蔽ふに向拜むかひを以てし、その補強材に手挾てあを挿入するが如き、支那建築の教へざるものを追補して民族の好尚に合致せしめたのを和様と解する。

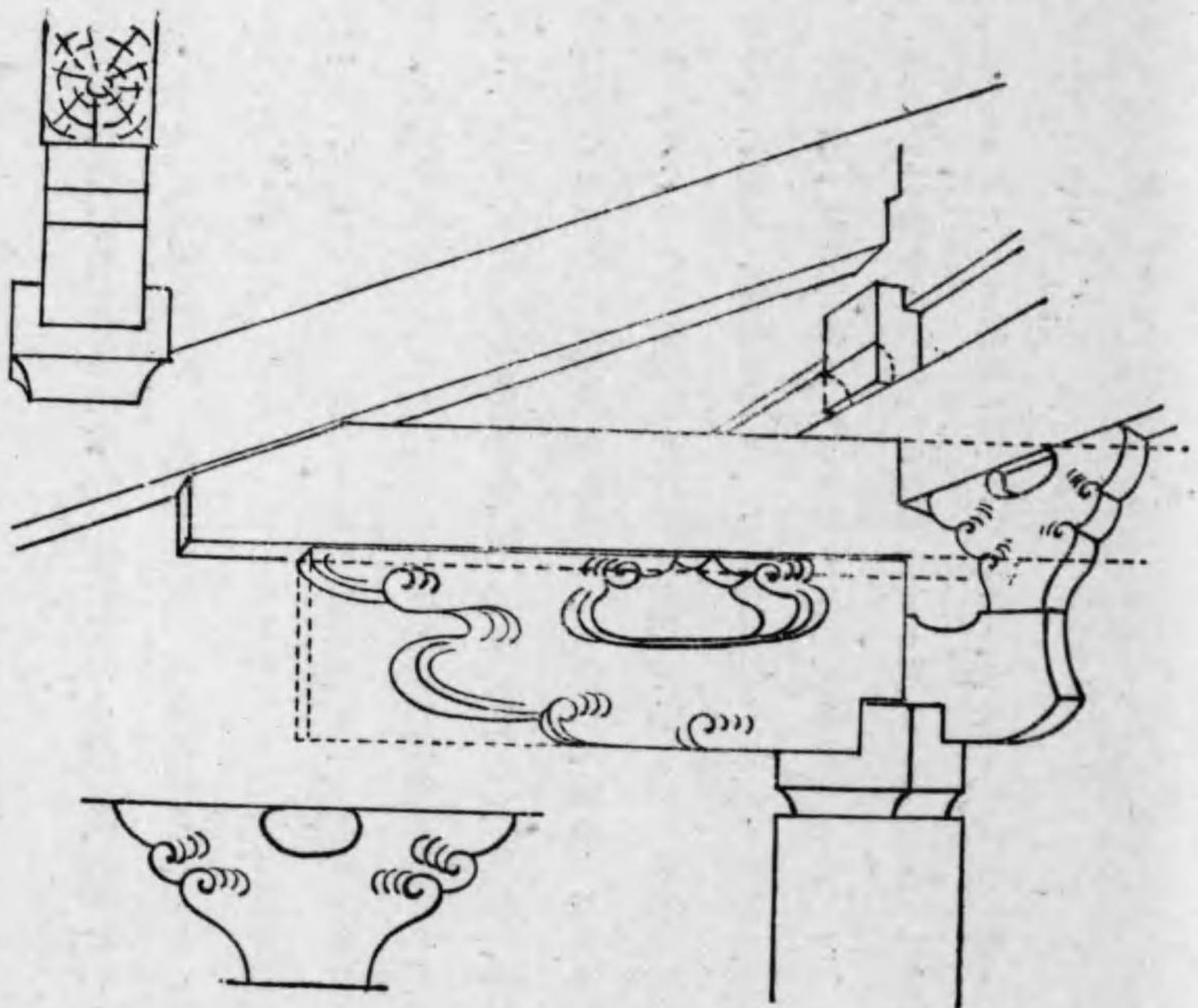
我國のごとき多雨の國にありては、建物を雨の侵害から防護するには軒先を深くすることが第一義である。私はこれが支那建築と日本建築との岐路となるものと考へるのである。大陸には雨が少ない。従つて支那の建築物は軒の出に考慮を拂ふこと薄く、屋蓋の荷重を柱頭でうけることに力めてゐると見うける。即ち軸部の柱頭に通り肘木を重ね、これを井籠いろうに組んでゐる。形は昔も今も變りがない。私が前年滿洲義縣の奉國寺（遼代の建築で約九百年前の建物、即ち藤原初期に相當す）を見學したとき、その本堂の前面に立つて見あげた利那、私の腦裡に浮びたものは法隆寺の金堂及塔婆の姿であつた。それは頭貫の上に積み重なる通り肘木のいかめしさ、が兩者共通の手法であつたからである。この點から觀察して、私は法隆寺に於ける飛鳥建築の構成法が未だ支那建築に依存することの多きを認めるのである。

因にいふ。奉國寺は木造建築といはれてゐるが、木造の部分は前面と屋内の柱列とで、兩側及背面は約三分の二が磚積の壁、上部約三分の一が窓の如き形で木造になつてゐる。

x

想ふに、支那式建築が我國に傳はつた當初は、支那の建物その儘の姿を移したものであつて、磚造のものもあつたらうし、軒の出などは浅いものであつたであらう。然るに歲月經過の間に雨の脅威を感じることが深刻になつて、こゝに磚を廢し、軒の出を深くすることになつたのであらうと推察する。そこで軒の出を深くするに就て、これを支承する構架材の設備に一段の工夫をこらすべき日が到來した。そしてその工夫の一つが所謂雲斗雲肘木の形となつて出現したものと考へる。

一般の伽藍建築を観ると、かういふ場合に軒の出を支承するものは、斗とと肘木ひぢき（合して斗拱とまがらともいふ）との組合せから成つて居り、それを『手先』と呼んで、一手、二手と次第に持ち送り、せり上げてゆくのである。然るに法隆寺の場合はこの持送法が用ひられずして、尾樞を支持するに大腕木を用ひ、更にこれを雲斗雲肘木で支承させてゐる。そこでかゝる異様の手法を採用した理由如何といふことになるが、さてこの理由を解釋することの如何によつて、この怪奇の存在が謎となるか否やを分岐するポイントとなる。



所謂雲斗雲肘木が斗拱でないこと考ふる次第を本文中に詳述したがこれを理解よくするために上圖を掲げてみた。尤も圖を熟視すると斗拱のやうな方式を以て持送りを行ひたい、といふ希望の潜在することを看取し得るのである。

壁面に平行して置かれた三斗は肘木には常形を用ひ、斗だけを雲形に彫成してゐる。これは雲斗雲肘木に調子を合せたに外ならずと考へるが、如何。

前にも述べた通り、支那には一千年を越ゆる建築遺構がないから、實物に就て考査することは不可能事である。従つて石窟、石闕、碑面、明器に残されてゐる建築物の様態を探究するのの一つの手がかりとされてゐる。然るにそれらの物體に現はれた建築物には、平三斗ひらみつたてはざらに見うけが、出三斗みづたては一向に見當らない。従つて支那の建築物に、軒を支承する手法として持送法を使用し、しかもそれに斗拱を充當したことは、よほど後世の事象に屬すると見てよいと思ふ。すでに先進國に作例なしとすれば(あれば遠慮なく模造したであらう)、我國で斗拱持送りの如き巧妙な手法の案出されよう筈がない。しかし雨の脅威は絶えず迫つてゐる。これを防護する當面の手段として軒の出を深くすることに力め、これを支承する方法として、大角材を水平に突き出し、それを補強するため更にその下に重ねて角材を置き、これを美化して二重角材の武骨さを緩和せんと試みたものが所謂『雲斗雲肘木』なのである——と考察するのである。そこでこの考察に従へば、雲斗雲肘木とは誰が命名したのかは知らないが、これは斗でも肘木でもなく、大腕木の補強材を修飾するために施した一種の繪様彫刻たるに過ぎないといふことになり、多年の謎もここに終止符をうつことゝならう、かと思ふのである。

x

以上説き來つたことによつて、雲斗雲肘木の怪奇相は一應解消したが、それがためにこの構材のもつ存在の理由が薄弱になつたかといへば、決してさうではない。由來雲斗雲肘木はその怪奇の様相を珍重されてゐたが、その本來の使命はむしろ荷重を支ふる構材たるにある。即ちその上に載せた大腕木と協力して深き軒の出を支承することにある。後代にはこれが三手先又は四手先の持送方式となつて甚だ美化されるに至つたが、當初かゝる巧妙な技法の案出されなかつた時代に於ては、當面の必要に對應する考案として最も適當な構材處理法であつた。従つて後世に於て三手先又は四手先斗拱を以てこれに代位せしめることゝなつても、雲斗雲肘木が示す荷重負擔の關係を考慮し、所用材料を大にした結果、我國の斗拱は頗る剛宕強健の態を備へ、觀る者をして鑑賞の眼を見はらしめる。

私は朝鮮、滿洲、北支を兩三回に亘つて巡遊し、かの地に現在する建築物を能ふだけ見あつたが、いづれも斗拱を裝飾品として扱つてゐることに氣がついた。然るに我古建築に用ひられてゐる斗拱は支承力たることを本領とするが故に、その風貌に男性的氣魄をやどし、黒くすぶつてゐる状態に於ても、建築美の要素たるに不足することはない。若しそれ滿支建築物の斗拱があつた粉飾を失つて黒くすぶりになるとしたら如何なるものであらうか。化粧をはがした職業婦人にさも似たりで、

定めて見すばらしい姿となるであらうことを憐むのである。

かういふ觀察の下に、私はこの寺をおとづれる毎に、我國の斗拱持送りを生んだ母胎としてこの雲斗雲肘木の構成にあかす眺め入るのである。若し法隆寺の今の飛鳥建築がなかつたなれば、かゝる想定を立つるのすべもなく、堂塔の軒先支持の構材は、初めから、斗拱の構成に依つたものと解したのであらうと思ふ。偉なるかな法隆寺の雲斗雲肘木の存在は!!

四、高麗尺使用の問題

これは謎のうちに入れるやうな性質のものでもないが、從來秘められてあつた問題が明るみへ持ち出されたといふ點から、便宜上この『謎の寺』の部で説明する。これも流石に法隆寺らしい話題ではある。

法隆寺建立に際して使用された尺度は何であつた？ 法隆寺參詣に度を重ねた人達でも、何の示唆をもうけずしては、この點に想ひ到る人は恐らくあるまい。それもその筈である。この點に着眼し、これを問題として世間に持ち出したのは、誰あらう、故關野貞博士を以て魁とするのである。博士はこれを以て自家の守持する非再建論の一據點たらしめたのみならず、學位收得の論文の一部

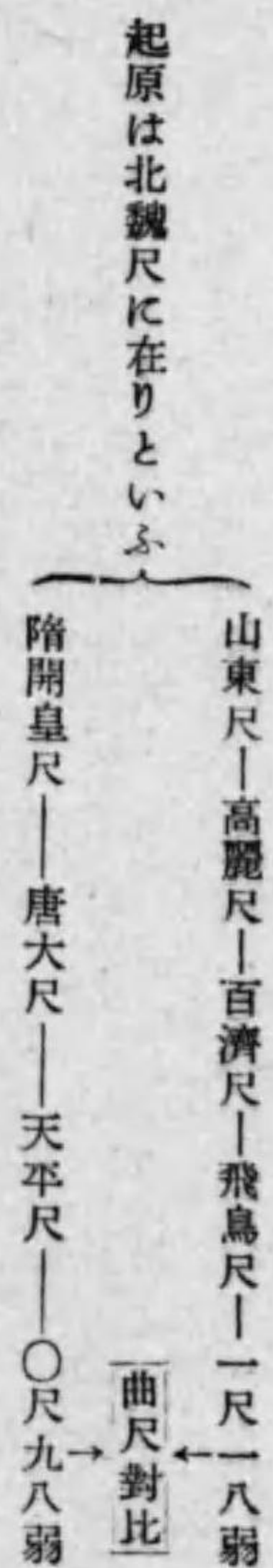
たらしめたのであつた。

關野博士の研究を要約すれば、現存の法隆寺建築に使用された尺度は高麗尺こまじやくであつた。これはまづ曲尺を以て建物各部の寸法を測定した結果を高麗尺並に唐尺で割つてみると、その完數(ラウンド・ナンバー)を求めるには高麗尺の方が近似數を得られるといふのである。尤も完數(ラウンド)といふところで、眞に割り切れたのではなくて、それに近い數を出したといふことで、それには唐尺よりも高麗尺の方が適してゐるといふ意味である。従つてこれには反對論者もあつて、喜田博士の如きは唐尺で割つても大差なしと唱へて居られた。しかし高麗尺は飛鳥時代に盛行した尺度であり、關野博士の研究は學位收得の料となつただけに精細を究めたものであるから、この問題はまづ同博士の主張に隨従することとする。

高麗尺とはその名の示す如く、古く(約一千五百年前)高麗即ち高句麗かうくわいで使用された尺度の制であつた。その起原は判然しないが、渤海灣を中に挟んだ山東や遼東の地に行はれた胡族系統の尺度に因由すると考へられる(藤田元春氏著『尺度綜考』を援用す)それが地理的關係から鴨綠江流域を勢力圏とする高句麗に傳はり、それから朝鮮半島を南下して百濟・新羅に及び轉じて我國に渡來したのであるが、さてその運搬の役を勤めたものといへば、實に佛法流布に伴ふ造寺關係の工匠で

あつた。詳しく言へば、日本紀崇峻天皇紀元年の條に記載された寺工、瓦博士、鑿盤博士等の工匠間に行はれた尺度が高麗尺であつたから、その流れを汲んだ我國建築技術者の使用した尺度も自然高麗尺であつたことは論ずるまでも無いであらう。

然るに大化の新政行はれて後は、萬事唐制に倣ふこととなり、尺度の制にも唐の大尺を採用されたから、爾來唐尺流行の世となつて、高麗尺は公用方面から次第にその姿を没し、漸く民間の布尺（今の鯨尺の根原と考へる）に餘喘を保つに過ぎない有様となつた。それは兎も角も、支那・朝鮮・我朝を通じて高麗尺使用の時代のあつたことは、歴史上の事實として東洋史に載せられてゐるかから間違はない。しかしその尺度を使用して建てた建築物が何處にか残つてゐるかといふ段になると、本家本元の支那や朝鮮には全くその跡を止むるものなく、こゝに唯一つ法隆寺内院の一廊を指して『即ち是れ』と應答し得ることは、我日本帝國の誇りとして高唱強調し得るものであらう。事の序を以て、讀者参考のために、我國尺度の由來に就て、判明してゐる點を左に紹介する。



古くは、今日の文明諸國に行はれてゐるやうな、尺度の原器なるものが無かつた。これは我國だけでなく、何れの國も同様である。従つて一分や二分の誤差は何れを正しいと決定し難い。殊に尺度には徐々に寸延びをする習性がある。現に法隆寺内院の建築物にも、個々の間に單位の相違がある。即ち（一）金堂、（二）塔婆、（三）廻廊といふ順に寸延びがあり、それが工事の施工順に伴うてゐるのも面白い現象である。従つて右表の高麗尺の曲尺對比を一尺一八弱としたのも一種の平均價である。唐尺の如き、大尺は開元通寶の十二倍といふから、曲尺對比は〇尺九六である筈のものが、我國では、右表の如く二分弱の寸延びとなつてゐる。こゝに高麗尺が寸延びして鯨尺と變じ、唐尺が寸延びして曲尺となつたと考へられることも、尺度に附隨する習性の然らしむる所と見るべきでなからうか。

近來メートル制の採用に反對して、永年慣用の尺貫法の存續を強調する向がある。吾人はその主張の是非に關しては何等言ふところはないが、尺貫法を以て國粹保存に擬することは、これを右表と對照してその當否如何を疑ふものである。

古建築鑑賞

三四

古建築物が建築美をたゞえられるに就ては大に謂れのあることである。或種の人達は『古いものはよい』と定めてかゝつてゐるが、決して左様な單純なものではない。古いものでも賞美し得ないものがあり、新しいものにも結構なものがある。要するに、新古の差ではなく、物それ自體が備へてゐる素質の良否如何に因るのである。しかしそれに就て考慮を加ふべきことは、古いものになると、鑑賞に値しないものが次第に影を没し去り、残つてゐるものには相當價値あるものが多いといふ事實である。曾て私は或骨董商から『宋人の書いたものならへ、へのもへ、へのとあつても價値がある』といふ話を聞いたことがある。これは骨董品ならいざ知らず、眞の鑑賞に値するものはさういふものでない。いづれも物それ自體の素質が良く出来てゐなければ駄目と斷定するに躊躇しない。

古建築物が、たとへ古ぼけてゐてもなほ美觀として鑑賞されるには、この古建築美を構成する諸種の條件を保有してゐるからである。即ち當代の工匠が拂つた勞苦の結晶と見るべきものである。今これを法隆寺の飛鳥建築に就て習得してみようと思ふ。尤もこの古建築美の習學は法隆寺の飛鳥

建築に限つたことではないが、この建築物ほど美觀構成の條件を具備したものが他にないから、特にこゝに一章を設けてこの寺を拜觀する人達の指導に當てようとするのである。

一、安定感のいはれ

安定感とは立體的物體に對して不可缺の要素であるが、殊に建築物に關しては最も留意されなければならぬ要件である。例へば、倒れさうだ、潰れさうだ、折れさうだ——などといへば、建築物にとつては絶對的禁物であらう。然るにこゝに眼の錯覺なるものがあつて、物の扱方によつて物の本來の形を歪曲させる場合が少くない。その一例をいへば、試みに空間に一本の桁を架けてみる。その桁が眞直なものであるにかゝはらず、その中央に於て上へむくれあがるか、下へ垂れさがるか、何れかに歪んで見えるのが普通である。これが錯覺である。そこでこれを避けるために、かゝる場合に際しては、その錯覺の生ずる部分即ち桁の中央に於て上邊又は下邊を削ぎとり、そこに反りを有たせて錯覺の矯正を試みるのを常則とする。

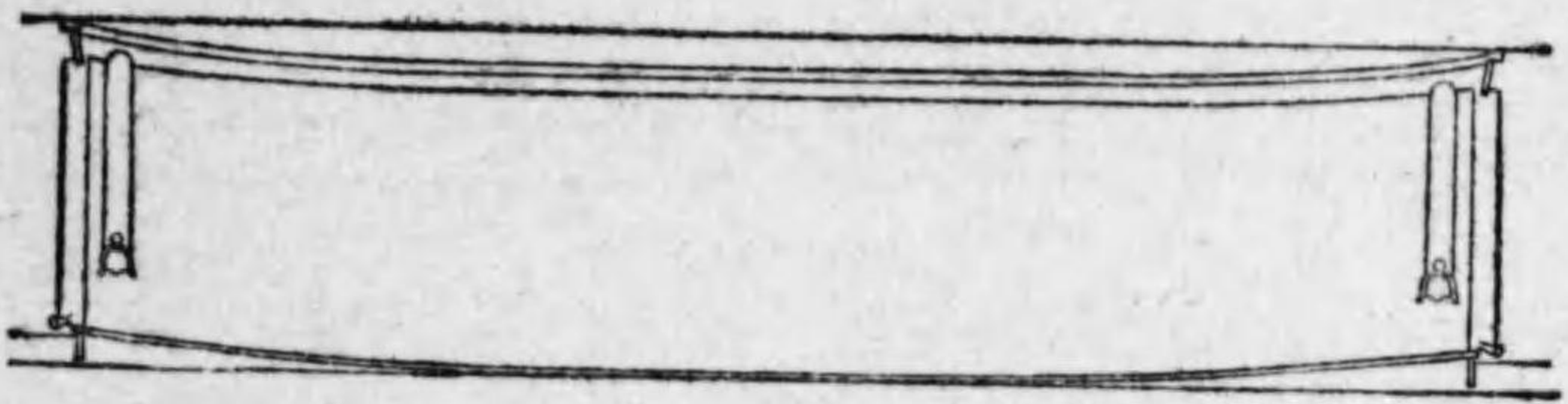
而して古建築が一般にその姿の美しさを讃えられてゐるのは、畢竟この安定感に對する用意を具備してゐるからであつて、しかもこの要件を具備した規範的のものを索むれば、吾人は法隆寺内院

の一廓を以てその王座に置くべきものと主張するのである。而してその實例は左に

二、眞反り

先づ中門の大棟と軒先とを熟視されよ。何の氣なしに眺めて居れば單なる水平線と見ゆるに過ぎないであらう。しかしそこに棟又は軒の兩端から中央に向つて緩やかな曲線が引かれてゐようと注意をすれば成程と合點がゆくであらう。この緩やかに引かれた曲線を『眞反り』と呼ぶのである。而してこの眞反りを附ける理由はといへば、これは前項に説明した通り、これを附けずして直線を引いた場合は、眼の錯覺によつてその中央部がむくれ上り、大棟や軒先の形がくづれて見える。そこでこれを矯正せんとするには、線全體に亘つて緩やかな曲線即ち眞反りを附ける必要が生ずるのである。

大抵の古建築物にはかゝる場合に眞反りを附けてあるが、それも時



東大寺轉門蓋の眞反り

代が降るに従ひ次第に粗笨に陥り、大棟も軒先も申譯的に兩端で反りを有たせたに過ぎないものとなつて行く。然るにこの中門に於ける眞反りはその名の『眞』に背かず、兩端から徐々に下り來つて正中で終つてゐる。

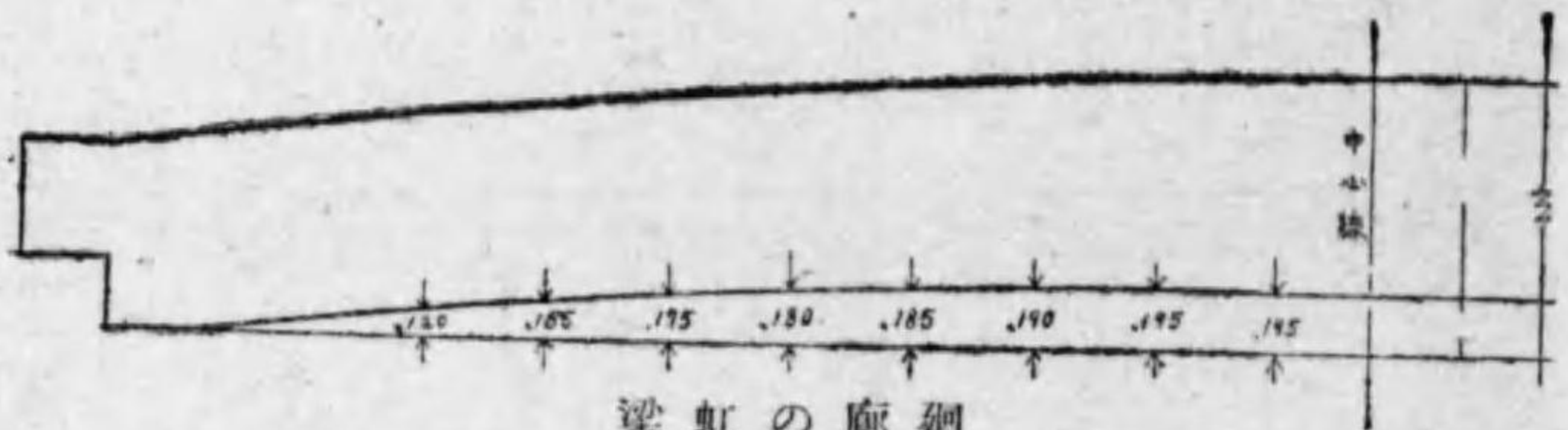
かういふ風な曲線は、大棟や軒先だけでなく、屋蓋の全體に亘つて働いてゐるのであつて、これが飛鳥時代から天平時代にかけての建物の屋根を輕快に見えしめる理由である。小學國語讀本第十一卷『法隆寺』の條に

軒といふ軒は、まるで天上に舞上るやうに長く張出してゐる。屋根といふ屋根は、天女の羽袖のやうに、なだらかな曲線をえがいてゐる。

と形容してゐるのは、即ちこの曲線の働きを讚美したものである。

而してこの説明は塔婆や金堂の屋蓋にも適用すべきものであるから、拜觀者はその心組で觀て貰ひたい。尤も金堂上層の屋根は元祿の大修理に多少變形されて格を落してゐるらしいから、大に酌量を加ふべきものである。

眞反りの話が出れば、廻廊構材の一たる虹梁の話は忘れてはならない。一體梁は何れの場合に於ても必ずその上に何か荷を擔ふものである。従つてその梁が荷



廻廊の虹梁

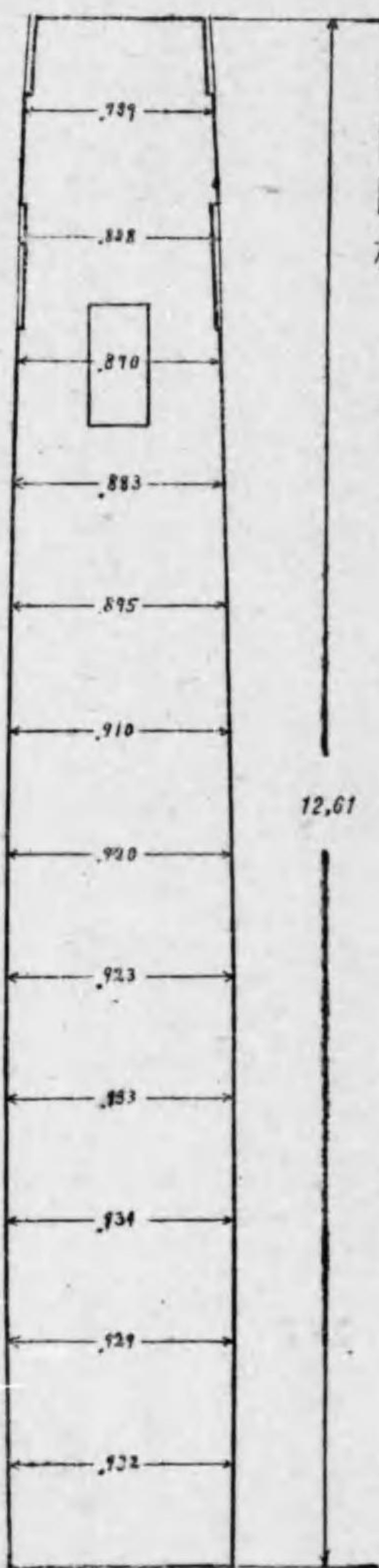
重に壓せられて撓むやうに見ゆることは建物の安定感に對して禁物である。前段にも述べた如く、空間に水平に架けた構材は、上に荷重がなくとも錯覺のために垂れさがる嫌あるを免れない。殊にこの廻廊の虹梁の如きは、上に頼杖ほろつゝまを載せてゐるから、尙更おし下げられるやうな感じを強める。そこでこの感じ（錯覺）を除去するために、その下端を削ぐ——即ち下端全部に互つて緩やかな曲線を付ける。なほその上に梁全體の調子をとるために、下端の曲線に相應して上端の兩端に於て若干勾配（曲線）を付ける。かうして出来上つたのが即ち虹梁であつて、その名に負ふごとく虹の形狀を表はすのである。さり乍らこれは下端の曲線が眞反りである場合に於てその効果が頗る多いのである。詳しく言へば、兩端から徐々に中心へ上り行くやうに工作されたもの程、虹梁としての効果を發揮することが多いのである。而してこの條件に適合するものは、法隆寺内院廻廊の虹梁を以て天下一とする（後章『中門・廻廊』の部を参照）。

三、エンタシス（膨み）

法隆寺内院の廓内に入り、中門を振り返つてしげくと眺めて見よ。どの柱も中膨れ（德利型）となつてゐるといふ珍しい手法の存することに自ら氣がつくであらう。この手法を「エンタシス」と

稱へてゐる。それに氣がついて廻廊を見ると、その柱にも同様の手法が加へられてあり、更に塔婆も金堂も（内へ入ると）同様であることを見出すであらう。しかしかやうな容態は法隆寺に限つたことではないので、天平期の建物は勿論、平安上期までもこの手法が傳へられてゐることは、現存の遺構によつてこれを證明することが出来る。さり乍ら世が降るに従ひ膨み方が薄くなつて目立

中門圓柱



たないやうになり行くのが定則である。然るにこの寺の柱の膨みが特別に著しくて恰當の説明資料となるから、法隆寺名物の一つとして特に採り上げられてゐるのである。

かやうに柱に膨みを付ける様式は遠くギリシヤの古建築に存して居り、東西の建築様式に一脈相通するものゝあることを示してゐる。果してこれが東西文化の交流に基因するものなりやは未だ判

然と言明し得ないが、ギリシヤの神殿建築にこの手法の使用されたのは法隆寺建立に先だつ一千有餘年前のことであり、又佛教東傳が支那に及んだとき、その文化的將來物の中に夥しいギリシヤの香を帯びたものゝ存する點から考へて、北魏の石窟寺に遺した膨みある柱もその淵源を遠く西土に求むべきものと認められ、従つて法隆寺に使用するエンタシスの手法も彼れの流れを汲むものと考察して差支へないらしい。元來エンタシスといふ名稱が已に西から來た言葉であり、ギリシヤの流風を承けた西洋諸國では今も盛にこの言葉が使用されてゐるのに、東洋ではその實あつて名を有たないところに、その出自が東洋でないことを反證するとも言ひ得よう。

x

さてエンタシスを附ける理由は如何。これには二つの解説がある。その一は力學的必要から、その二は目の錯覺を避けるがために——これである。力學的説明は、人間の手足が兩膊兩肢の中間に膨みを有つてゐることも判るやうに、頗る傾聽に價する學説であるが、今は第二の目の錯覺に對して用意されたものとしての點を採りあげたい。

柱は屋蓋を支持するものであるから、それが上部の荷重のために折れさう又は挫けさうに見えるやうでは心細い。然るに柱がその左右に壁を有つ場合は、壁が區切つて描く線の明白なるがために

柱の太さはその有りの儘を人の目に映し得るのであるが、それが吹き放しとなつてゐる場合は、その中央の上部寄りに於て内側へ削りて見える——即ち目の錯覺によつて本然の姿が歪曲されるのを難とする。殊に柱が長い程その歪曲の度が著しいといふ癖性を有つてゐるのである。茲にこれを矯正するために柱のどの部分にか膨みを有たせる必要が生ずる。而して柱の全部に互り若干の膨みを徐々に下方に向つて附けたのがギリシヤ式であつて、その膨み加減は柱全長の五百分の一を限度とするさうである。それがローマに移ると、柱の下部から三分の一に當る部分が最も太く、礎盤に近づいて稍、細く、上部は柱頭に向つて次第に細まり行くといふ方式となつた。これが、膨みが目立つて徳利型に見える理由である。我法隆寺のそれは正にこのローマ式に近いものであるが、この膨みを附けることによつて錯覺の矯正が行はれ、柱が如何にも力強く蹈張つて上部の荷重を支へてゐると見うけられる。而してこの兩者の相似は暗合したのか、傳承に由るのかは、今の歴史研究の程度では、これを判明ならしめ得ないのを遺憾とする。

それは兎も角もとして、この寺の建物にこの偉大なる錯覺矯正の用意が備つて居り、假令それが外國からの傳承であつたとしても、一千三百年（或は二百年）を持ち續けてこれを現實のものとして人の目にうつし得るといふことは、眞に法隆寺の譽れ——同時に我日本帝國の譽れとして世界に

誇示して可なりと考へる。

x

因に『錯覺矯正の程度』に就いて一言述べておかう。總じてこの矯正なるものは、錯覺のために歪曲された部分を矯め直して、その本然の姿に見せ得る程度を以て目安とすると考へる。従つて矯正されてゐることが目立つやうでは成功と言はれない。一例を挙げると、上へむくれて見えるのを防ぐために眞反りを附けたとする。然るにそれが直線と見えないで、一見して上へ反つてゐることが判るやうでは上出来と言へないであらう。この點から考へると、支那建築に於てやたらに大棟を反らせたり、軒の隅を跳ねあげてゐるが如きは、畢竟行き過ぎと貶すべきものである。又前上エンタシスの話に於ても、ギリシヤ式を賞揚すべきか、將たローマ式を採用すべきかは未だ疑問であるから、自然法隆寺式を最良の手法として譽めちぎるのは少し早すぎると思はれる。

四、遞減率

これは錯覺とは類を異にするが、やはり安定感の範圍内に入るものであるから此處へ書きつけよう。これにも中門を例として説明する。この門は上下二層から出来てゐるが、氣をつけて見ると、

上層は下層よりも規模を縮小してゐることが目に着くであらう。このやうに上へすばまりゆく容態を『遞減率』と稱へる。それでこの遞減率が加味された結果として頭がちとなりたがる傾向が除かれて、極めて安定した感を觀者に與へるのである。大體に於て二重の屋根を戴いてゐる關係から屋蓋が軸部を強壓する嫌あるにかゝはらず、この門に於ては屋根の勾配に曲線を附けて輕快ならしめた上に、二重屋根に適度の遞減を施してあるから、門全體に少しの危げな點がない。これでこそ安定感を完備したものと誇稱し得るのである。しかもこれに對しては、手近にある南大門が引立役を勤めてゐるのも面白い現象である。

試みに、振り返つて南大門を觀られよ。その屋蓋と軸部との釣合は如何。屋蓋を大にしたのは立派のやうであるが、その勾配の急なるがため、鈍重(重苦しい)の感あるを免れ得ない。而して屋根の鈍重なるに對して軸部の用材の細小なるは、頗る上下の權衡を缺き——語を強めると、宛も重し屋根が輕い軸部を押し潰しさうに見えると言ひ得よう。こゝに安定感は失はれて、建築價値に缺けることの夥しいものとなる。しかし遞減率の價値を眞に會得せんとするなれば、内院に聳え立つ五重塔に就て學ぶに如くものはない(後章『塔婆』の部を参照)。

諸堂拜觀

四四

以上で法隆寺に於ける飛鳥建築に共通する本質的説明を了へたから、本章に於ては各個の建築物とその内容とに就て説明を試みよう。

この機會を以て飛鳥建築と飛鳥時代の建築との區別を説明しておくのが適當と思ふから、一言これに言及しておかう。この二つの名稱は同一の意味に使用されることもあり、又別種のものとして使用されることもある。而して別種のものたる場合には、飛鳥建築とは飛鳥様式の建築物といふ意味を有つのであつて、飛鳥時代以後に建立されたものにも使用して差支ないのである。

さてかうなると、飛鳥時代に建てられた飛鳥様式の建築物とはどういふ風の建物であるかといふことになるが、實はそれが全然判らない。即ち飛鳥様式の建築物として示すべき規範的なものは一つも残つてゐないのである。そこで故喜田博士をして再建論提唱の初頭に於て『私はまだ眞の飛鳥建築なるものを見たことがない』と、眞向から非再建論に肉迫せしめたのであつた。尤も飛鳥建築のお手本となるべきものがあれば、今の法隆寺の内院が飛鳥時代に建立されたものか否かと直に

判明し、自然再建、非再建のどちらから成り立たないことになるが、そのお手本が存しないがために論争が成り立つたのである。従つて今の法隆寺内院の建物が飛鳥時代の建立に成ると主張する論者も、畢竟諸種の資料から推定した結論の上に立つて論議するものたるに外ならない。

かゝる次第であるから、煎じつめたところ、飛鳥建築なる稱呼は一種の假稱たるに過ぎないのであつて、法隆寺内院を構成する建築物の手法様式と、その後には現はれた斗拱持送法による構架法との間に存する相違を言ひ表すに當り、前者の建築様式の古風なるに徴して古き名の『飛鳥』を負はせたと見てよろしいと思ふ。尤もこれには非再建論者中に異議を唱ふる人があらう。しかし私が本冊中に使用してゐる飛鳥建築なる名稱はこの意味のものとして了解されたい。

序に一言。これより説かんとする法隆寺の飛鳥建築に關係あるものは、建築、彫刻、什器等一切を擧げて國寶指定に屬するから、各個を説明する場合にも、それが國寶なることを表示しない——ことを斷つておく。

一、中門・廻廊

【中門】 この門の建築美に就ては、前章『眞反り』及『遞減率』の部で述べたから、それを繰り

諸堂拜觀

四五

かへさないこととし、それ以外のこの門の特殊相に關して拜觀者の注意を喚起しよう。それは前に『伽藍構成』の部で一寸觸れておいた『二戸の制』即ち入口が二つあるといふことである。

【二戸の制】 元來門の入口は一つ（一戸）であることを常則とする。たとへそれが複數の場合であつても、必ずその中央（正面）は開けられてある。即ち一戸でなければ三戸といふ風で奇數になつてゐる。これは入つた正面に建てられた本堂（正堂）と對應することから起る必然の約束である。然るに法隆寺内院の中門は四間二戸の制となつてゐる。常則を破つたこの二戸制に就ては從來あまり識者の間にも問題とされず、單に奇妙な存在として扱はれてゐたに過ぎなかつたが、これを問題として採り上げた最初の學者は天沼俊一博士であつた。博士はエジプト旅行を試みられた際に、門が二つ並び建ち、それが二筋の歩道によつて奥に並び建つ二棟の神殿に導かれてゐるのを見て、法隆寺の中門が二戸の制をとつてゐるのは、内院に存在する金堂・塔婆の對立と關係を有つものなることに想到されたから——と聞いてゐる。私はこの着想を以て實に學者らしい觀察として大なる敬意を拂ふものである（天沼博士著『埃及紀行』參照）。

常則を破つて二戸の制を採つたことは決して物好きや氣まぐれに出でたことではあるまい。而して内院を見渡せば、そこに金堂と塔婆とが互に氣勢を張り合つて建つてゐるではないか。この兩者



中門



中門（左脇）仁王像



法華說相圖仁王像

をいづれ優劣なきものとして扱はんがために、その入口に二戸を設けて正面を失はしめたるは、實に巧智の極と稱讚すべきものではなからうか。前章『金堂と塔婆との位置の變轉』の部で述べておいたやうに、法隆寺の伽藍構成は塔婆が一步を金堂に譲らんとする狀勢を見せた場面であるが、なほ塔婆に對する尊崇心の厚きことを示さんがために、その獨立性を強調すべく特にその入口を設けたから、こゝに二戸の制なる特殊相を現するに至つたと考へたい。私はこの問題が、今以て、軽く扱はれてゐることを我學界のために惜むのである。

門の兩脇に木心塑造の仁王像が置かれてある。像の姿勢即ち動きによつてそれが白鳳期の造像たることを認められる。これを長谷寺の法華說相圖中の仁王像と對比すると、作の良否は別として、その手法の同期に屬するものたることが判る。

【廻廊】 進んで廻廊を見よう。廻廊は單廊であつて、中門から東は十一間にして北折、西は十間にして北折する。兩者共に北折して突き當るところまでが建初の建物である。東方へは十一間、西方へは十間といへば、中門の中心は自然西へ偏倚することゝなつて、均齊の制を破らされてゐる。これは方形の塔婆と長方形の金堂とを一區に收容せんとする無理から發生した現象である。そしてその無理があまり目立たないのは工匠の苦心の存するところであらうが、それを建築技術の精華の

やうに激賞するのはいかなものか。建物は内側の柱を吹き放しとし、外側は窓と壁とで塞いでゐる。窓には連子かんじを嵌めてあるが、その連子は細く粗く極めて大ざつばに扱はれてゐる。建物の格が落ちるだけに柱の膨み(エンタンス)なども門に比べては薄い。それでも後世の建物のそれと比べては中々立派なものである。しかし廻廊に就て喋々するのであれば、頭上に架つてゐる虹梁を第一に擧げなければならない。

【虹梁】 これに關する説明は前章『眞反り』の部でその本性を詳述しておいたから、今一度あの部を参照されることを希望する。さて虹梁こうりやうの名の由つて來る虹と見えるやうな梁が見たいのであるが、その人に法隆寺内院の廻廊の一端に立つてみたまへとお勧めする。それはこれだけ完全な虹梁が他にないからである。まづ廻廊の一端に立つて向ふを見渡してみたまへ。虹梁各個の下端が美しい曲線を重ねあつて遠ざかりゆく姿は何に譬へて讚めようか。それよりも試みに廻廊内を漫歩してみたまへ。虹梁は頭上低く架つてゐるのであるが、何等の壓迫感を與へられずして通過し得るのであらう。しかもこれを逆に證明するものに東院夢殿の廻廊がある。これを又試みにその廊内を歩んできたまへ。必ず歩々その眼前に現はれ來る虹梁に對して、目を放たずして歩み得ないことに驚くであらう。以て安定感に對する擔當工匠の拂ふ苦心の大小或は有無が影響するところ鮮少でないこと

が判るではないか。

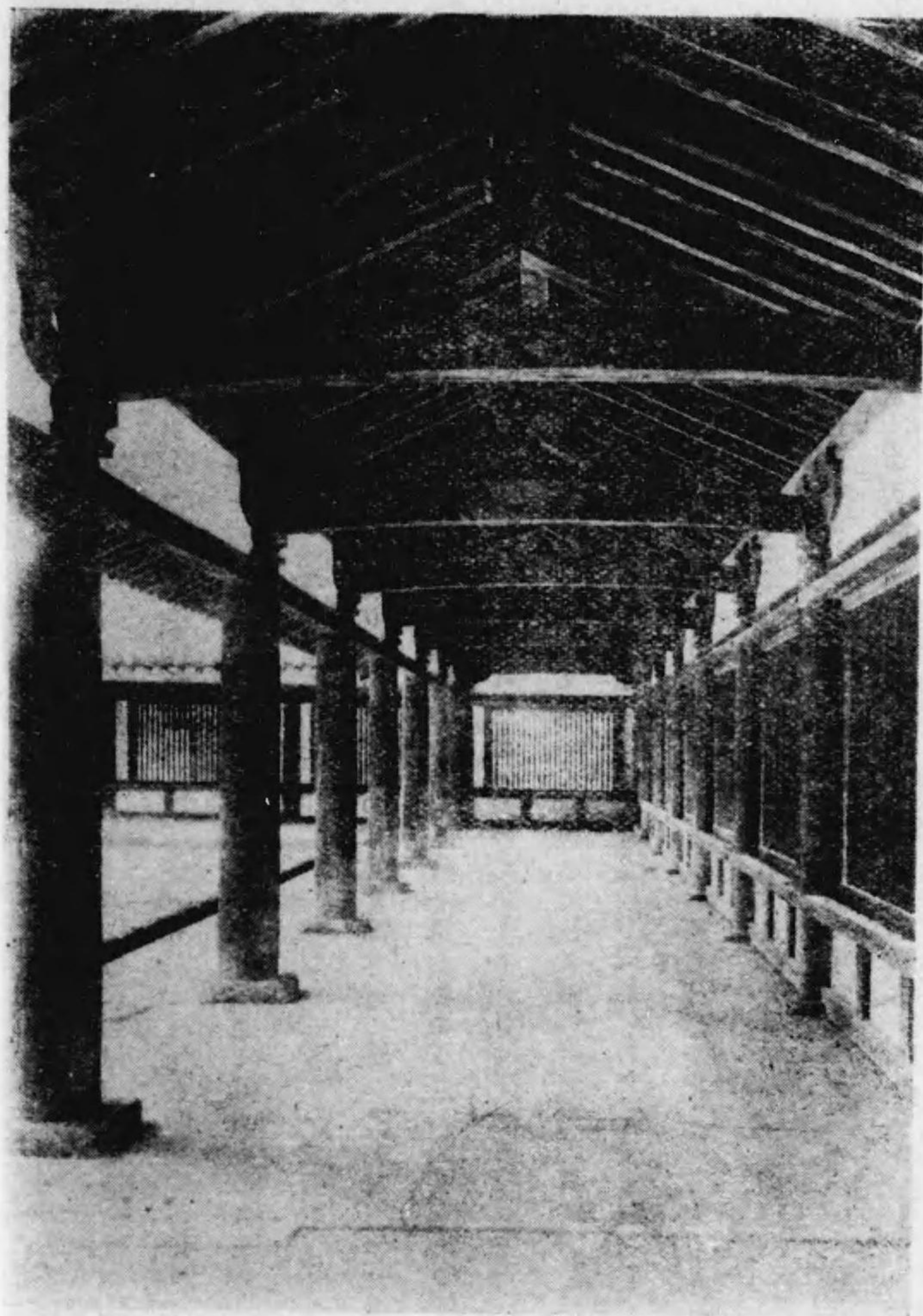
二、金 堂

【基壇】 堂は二重基壇の上に建つてゐる。これが飛鳥時代の流風のごとく説く人もあるが、それはともかくも、安定感の上から考へても用意の整うたものであることが判る。羽目石には全部松香石を使用されたであらうが、今は下壇を花崗石で張つてゐる。羽目石の張り方は自由放棄であるがそれが上代風であるやうに説く人もある。果してさうであつたかは判明しない。

【建物】 堂は重層、入母屋造、本瓦葺である。下層は間口五間・奥行四間、上層は遞減して間口四間・奥行三間となつてゐる。天平の法隆寺縁起資材帳に載せた

堂貳口 一口金堂。二重。長四丈七尺五寸。廣三丈六尺五寸。柱高一丈二尺六寸

とあるものに合致する。そして下層の周囲には裳階と稱へられる廂をつけてゐる。この裳階は塔婆のそれと共に本屋より後れて附加したもので、堂の分はその内壁に描かれてある有名な壁畫に、塔の方は心柱の四方に配置された塑像に關係があり、共にそれらを雨濕の侵害から保護する役目をもつものと考へる向がある。さういへば、畫及像の手法と裳階の建築様式とが時代を共にするものと



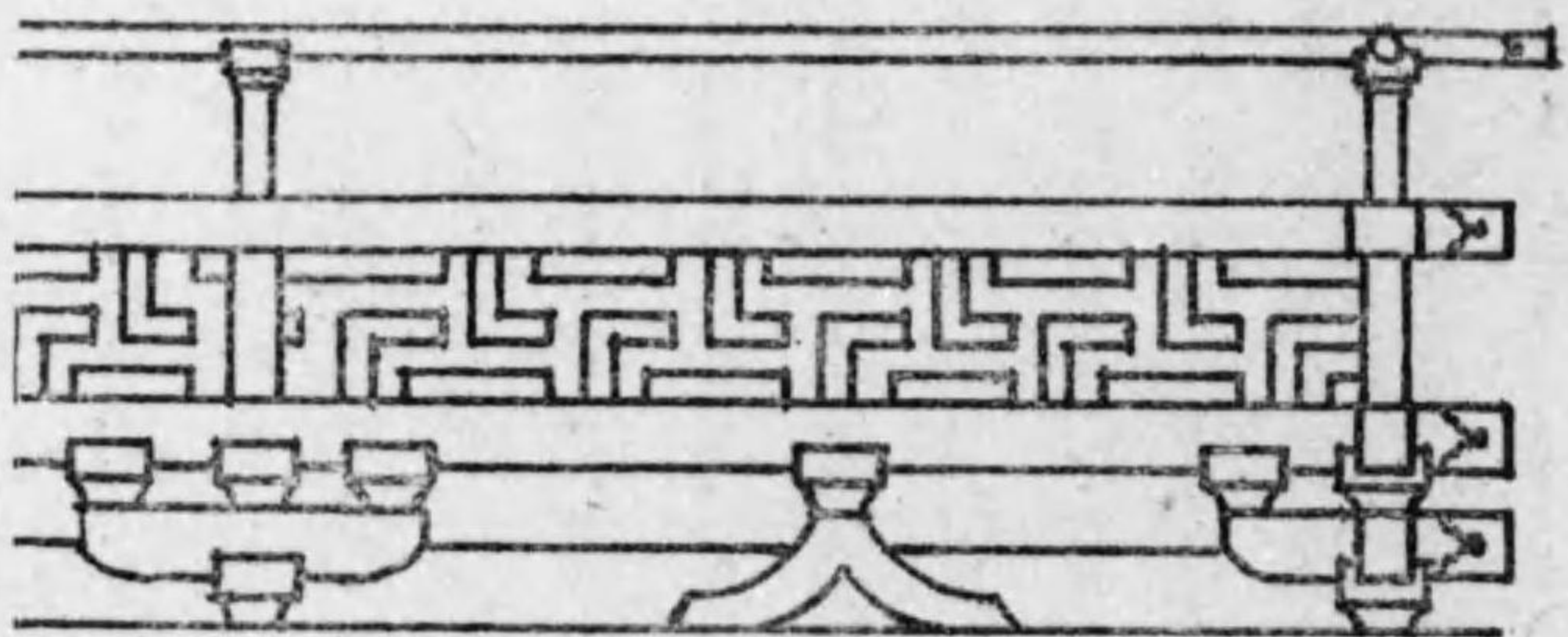
廻廊の虹梁

の鑑定にも合するやうである。

軒は一重繁極であるが、出が深い。そしてこの深い軒の出を支へる構材は、これを上から數へて、木割大なる角極、尾極、大腕木、雲斗雲肘木といふ順になつてゐる。これを斗拱持送りの支承法式と比べては極めて簡素であり、従つて美觀を備へざるものであるが、粗大素朴なところに野趣をたえてゐると鑑賞して宜しからうか。

【組勾欄】 堂の上層軸部の周圍をめぐつて組勾欄が附加されてゐる。勾欄は中門の上層及塔婆の各層にも附加されてゐるものであるから、これを一束にして此處で説明しておく。これは元祿の修理に取り換へられたので用材は新しいが、その様式は頗る古く、その淵源をたづねると北魏時代の遺構に遡及することが出来るから、當寺創建のときから堂塔に附加されてゐたと見てよく、又それによつて當建築物の古式なることを證するものとも見做し得る。しかしこの附加物を飾る卍崩組子の手法は天平時代まで使用されてゐたもので、東大寺法華堂本尊の八角座の組子として用ひられてゐるのを以て立證することが出来る。殊にその腰組を飾る人字型の割束は、後世盛に用ひられることになつた臺股の起原と認められて重視されてゐる。

たゞしこの組勾欄は裝飾的に扱はれてゐるもので、實用に供するものではない。上層軸部の高さ



組 勾 欄

に比例して勾欄が高すぎるのもそれが爲めであり、又踏板を備へてゐないのもそれが爲めである。更に勾欄構成の材料たる架木、平桁、地覆が直線であつて、その端に反りのないことも古風を示すものとして注目されてゐる。

【屋蓋】 屋根の形は元祿の修理に改悪されて、今見るとき非常に鈍重なものとなつた。建初の屋根の形は玉蟲厨子の屋根に見るやうな輕快な風を示してゐたであらう。しかも鍛葺であつたことは、今の小屋組にもその痕跡を残し、極が二段つぎとなつて鍛葺の下地であつたことを示す部分があるさうな。従つて現在妻飾に用ひられてゐる虹梁、大瓶束、花肘木さては破風、懸魚のたぐひも皆江戸期に屬するものである。

【建築用材】 金堂の内部に入る。まづ目を見はらすものはその建築用材である。正面に三戸を開き、背面中央に一戸、左右兩側面の北寄りに各一戸を開いてゐるが、それに吊つてある板唐戸は

高さ十尺、幅三尺、厚さ約三寸といふ檜の一枚板で出来てゐる。これは心去り材であるから、それに白太や樹皮を加算すれば原木はどのやうな大木であつたであらうか。一寸の厚みに年輪三十乃至四十を數へるのであるから、樹齡は一千年を超過すること幾百年といふべきものであらう。胴ふくらみの大柱も又見事なものである。眞の赤味材を使用してあるから、古いながらに光つてゐて朽腐の感じを起させることがない。建立以來一千餘年の星霜を閲し來つて、しかも根本修理を施されたことは無いのであるが、多少の狂ひはあるにしても、よくその建初の状態を持續しつゝあることはその用材の優良なるに因由すと認むべきであらう。

【斗組】 柱頭には臺輪をおき、その上に大斗が置かれてゐる。その大斗に皿斗が附加されてゐることも注目に値する。大斗の上に載つて三斗を構成してゐる斗と肘木とは頗る勇健にして高雅な風を示すものである。即ち肘木の下端の繰り方の優佳なるに對し、その木口が上位の斗尻と接續するあたりに剛強なる曲線を表現してゐるのが大なる見物である。殊に肘木の上端に見うける笹線は、天平期に見るやうな形式的のものでなくて、眞に彫りくぼめて肘の形を表現してゐることは、頗る珍とすべきである。

【内陣・外陣】 内部は間口三間、奥行二間を内陣とし、その外周の一間通りを外陣とする。そし

て内陣全部を須彌壇として佛達の占有にまかせてある點は、元來お堂は佛像を安置するを本旨とし勤行の外には、人の立ち入ることを考慮してゐない——といふことを如實に示してゐるのが尊い。注意して見れば、内陣の柱間は外陣のそれよりも廣くなつてゐる（内陣九、外陣八の割合）。以て内陣を重しとしてゐることが判るであらう。然るに世が降るに従ひ、外陣が擴大して内陣が縮小する傾向を生じ、終には厨子が内陣に代位するまでに退嬰萎縮する。こゝに佛殿のプランは信仰の變遷と相關性を有つことになるのであるが、横道にそれるから、話はこの邊で止めておかう。

堂内には天井が一面に張られて居り、外陣のそれは組入れ、内陣のそれは折上組入れとなつてゐる。そして天井の格間には一間一花の寶相華文を、折上げの支輪間には寶相華文や唐草文を描いてゐる。いづれも彩畫の華麗なるものである。

【安置佛】 以前は堂内にいろ／＼の客佛が混在し、博物館さながらの觀があつて尊崇心を薄がせたのは實に遺憾であつた。しかるに前年大寶藏殿の新築が成つて餘分の佛體をそこへ移したから、今は須彌壇に安置すべき當然の佛達ばかりとなり、すが／＼しさを覺ゆるに至つたのは何よりも嬉しい。須彌壇は柱間によつて三分され、東の間に藥師如來を、中間に釋迦三尊を、西の間に阿彌陀如來を祀つてある。

【藥師如來】 金銅佛。裳懸座に坐して、右に施無畏、左に與願といふ通佛相を現じたまふ。この『通佛相』といふのは如來形に共通する印相である。すでに『畏れなかしめ願をかなへる』といふのであるから、如何にも如來らしい立派な誓約である。従つてその印相を見れば如來像であることは判るが、何佛なるか判明しない。そこでそれを何佛と定めるには、それを造顯した場合の發願に因るのを定則とする。さういふことから、後世密教の出現に伴つて『儀軌』なるものが發生し、佛の印相を規定し置き、その表はす印相によつて何佛なるやを知らしめることになつた。

さてこの如來の光背は中々凝つたもので、中央の蓮華文をめぐつて唐草文を配し、外周に火炎を出してその中に七化佛を現してゐる。而してその光背の裏面にこの寺の草創を語る有名な銘文が鏤刻されてゐる。その文によれば

池邊大宮治天下天皇、大御身勞賜時、歲次丙午年、召於大王天皇與太子、而誓願賜、我大御病
太平欲坐故、將造寺藥師像作仕奉詔、然當時崩賜、造不堪者、小治田大宮治天下大王天皇及東
宮聖王、大命受賜而、歲次丁卯年仕奉

とあるから、文面の『歲次丁卯年仕奉』によつて法隆寺は推古天皇即位十五年の創建なりと斷ずることが出来る。これは正史の誌さざるところを補ふものとし稀代の文獻と珍重されて來たのである

が、しかしそれはこの銘文が真正銘のものと認めての話である。然るに近頃福山敏男博士の研鑽の結果、この銘文が追刻のものなることを發表されて、その評價に罅が入ることになつた。この論文は尊重すべき研究資料であるから、事の次第を紹介したのであるが、長文であり且要約することも爲しがたいから、詳細を知りたい人は東洋美術第十三號所載の『法隆寺の金石文に關する二三の問題』と題する一文を一讀されよ。尤もこの論文は未だ學界一般の肯定する所となつてはゐないし、私も今の場合これを支持して喋々せんとするのでないが、寺に秘められたいろ／＼の謎を解く時節到來の一つとして茲にこれを紹介しておく。たゞしこれによつても法隆寺創建の年次は依然として確言しがたいことだけは判つたであらう。

【釋迦三尊】 金銅佛。これも裳懸座に坐して通佛相を現じてゐる。この像は一光三尊形と稱へられるもので、舟形を成す一光背を以て三尊を包被してゐる形狀を指すのである。中央釋迦如來、向つて右が藥王菩薩、同左が藥上菩薩である。

若し再建論が成立すれば、堂塔は飛鳥時代の遺構たることから逸脱するであらうが、この佛像に限つては飛鳥時代の遺品たることを否むものはあるまい。その大まかな面相の扱ひ——即ち見開いた眼ざし、微笑する口元、寸胴のやうな首筋は直に北魏時代の作例に迫るではないか。姿勢硬直に



(作遺の魏北)相面佛石大崗雲省西山那支



右金堂藥師如來、左同釋迦如來の面相



して、衣文の襞を正直に均齊ならしめたるが如き、兩脇侍の態度のそつげなく、しかも姿態に左右の別をつけず同型を採らしめたるが如き、造像技術の幼稚なることを如實に見せてゐる。殊に表現に於て正面を主としたのは繪畫感を脱せざるものであつて、彫刻の本旨たる立體的技術を完成するに隔りあることを示してゐる。本尊の手の出し方がのびくとしてゐないのも、兩脇侍の天衣が鰭形となつてゐるのも、いづれも正面に重きを置いてゐることを證するものである。論より證據、像の側面から眺めるがよい。その偏平なることに驚かされるであらう。否、その背面を見れば何等の工をも加へられないことに二度びっくりするであらう。しかし考へてみれば驚くに當らないのであつて、造像技術の發達してゐない時代の作品なることを示すもの——即ちこれら佛像の造題時代の古きことを證するものである。なほこの説明は東隣の藥師像にも共通するものである。

この像にも光背の裏面に文體・書體兼ね備つた立派な銘文があつて、造顯の由來を詳述した上に作者の名までが誌されてある。即ち有名な鳥(止利)佛師がこれに當てられてゐる。しかしこれに對しても、福山博士はこれを追刻なりと考定されるのであつて、この像が銘文の誌すごとき動機に發したものを疑はれてゐる。それに光背の頂部に焼け疵があるとの疑ひもあつて、それが『法隆寺に災けり』の記事に關係があるのでないかとの説もあることを紹介しておく。

【阿彌陀如來】 金銅佛。裳懸座に坐することは前項の薬師・釋迦と異るところないが、印相は妙觀察智印を結んで自己の彌陀たることを表明してゐる。これは前に述べた密教に伴ふ儀軌に依據するものであつて、この佛像がその風態に於て飛鳥佛の様相を模しながら、實際に於ては鎌倉期の造顯にかゝるものたるを示すものである。さういへば、面相の秀麗なることや立體感の完成せることなど、到底飛鳥佛の及ぶところではない。この像は寺の創建と共に造顯されて現在の位置に在つたのを、承徳年間盜難にかゝつて一時缺席となつてゐたが、寛喜四年に再造顯して空位を補填したと傳へられてゐる。しかし今の位置には、古く他の佛像が安置されてあつたらしく、右の所傳の確實さは保證の限りでない。

【吉祥天と毘沙門天】 以前の金堂内は澤山な佛像を收容して宛も博物館のごとき觀があつたことは前に述べた通りで、多くの人の眼には映らなかつたであらうが、そこに立派な藤原時代の佛像が安置されてゐる。即ち釋迦三尊の臺座の少し後方の左右に分置された吉祥天と毘沙門天の二軀（共に木彫）がそれである。これは承暦二年に再興された金光明最勝法の本尊であつて、最勝法による釋迦如來を中尊とし、この兩像を脇侍とするといふ配置になつてゐる。兩像共に小品ではあるが、貞觀（まことみ）の塊量的な氣分を残しながら、藤原的な柔和さを表現してゐる點に於て、藤原初期の代表作

と認められる。

【四天王】 木彫である。そしてこれら四軀の像が造顯當初からこの堂に安置されてゐたのか、又は他から移入されたかは判明しないが、造像の年代はすでに白鳳時代に入つてゐるのである。直立不動の姿勢と衣文の硬直なることゝは前代（飛鳥）を繼承してゐるが、天衣（てんい）の翻展が側面への働きを見せてゐるものとして注目に値する。即ち飛鳥佛はいづれも正面本位を旨としてゐたが、これらの像は奥行を考慮することになつてゐる。これに對して源豐宗氏はその著『大和を中心とする日本彫刻史』の中に於て

これは明かに物の見方が立體的に進んだ結果である。……かゝる立體的な見方はやがて物の丸味を見る前提である。

と説かれたが、頗る要を得た見解であると思ふ（大寶藏殿の部『百濟觀音』参照）。

廣目天の光背の裏面に彫まれてある銘文中に『山口大口費（あた）』といふ人の名が出てゐる。この人は孝徳天皇の御代に活動した人であるから、この像が白鳳期の作品なりと認めることに合致するものである。

【天蓋】 東、中、西の三間の佛座の上には、各座各個に屋根形の天蓋を吊りさげてある。いづれ

の天蓋にもその軒端に天人と鳳凰とを置き、下縁の周邊には込み入つた文様や飾物を取りつけてある。内側は折上組入天井となつて居り、その格間や支輪間に寶相華文又は唐草文を彩畫で描いてゐる。たゞしこの天井裏の彩畫は比較的原態をよく遺存してゐるから、飛鳥時代の文様を研究する人には屈強の材料である。殊に外面の鱗狀を成してゐる部分は北魏・北齊あたりの天蓋文様を繼承するものであつて、その淵源は西域を越えて遠くギリシヤの卵舌文様に發するのではないかと考へしめかの忍冬文様と共に東西文化の交流に交渉を有つものとの想像が浮み來るのである。

因にいふ、東の間の藥師如來を蔽うてゐる天蓋は佛像と同期の作品でなく、鎌倉時代に修補されたものである。従つて天人・鳳凰等の様態も、飛鳥のそれに比すると、兩者の懸隔著しきものを會得するであらう。

【壁畫】 壁畫といへば直に法隆寺を想ひ起すほどに壁畫と法隆寺との關係は深い。それはその筈である——眞の壁畫といふべきもの、即ちフレスコに描いた壁畫は、我國に於てこれの外には無いからである。京都市日野の法界寺の阿彌陀堂にこの種のもが遺存するのは事實であるが、その價值の上からは到底比すべきものでない。否、我國に比類すべきものが無いだけではない、この種の技術を我國に傳へた本家本元なる支那に於ても、法隆寺の壁畫と等價のもの、即ち年代と技風とを

同じくするやうなものは一つも残つてゐないのである。

法隆寺壁畫の淵源が印度にあることは疑ふべくもない。今もアジャンター第一番洞窟に描かれてある脇侍の姿態は、法隆寺壁畫彌陀淨土の脇侍のそれと酷似することを認められる。そこでそれを基礎として、アジャンターの技法が一足飛びに我國に傳はつたと論定せんとするのは早合點たるを免れない。法隆寺壁畫に用ひられてゐる技法並に諸種の裝飾文様を熟視すると、頗る複雑なるものあつて、一源に發してゐないことが判る。即ち印度系のものあるは勿論、ペルシヤ系のものあり、ガンダーラ系のものあり、それらが支那に定着し漢文化の影響をうけて若干の變化を見せたであらうと想察する。かういふ風に諸種の要素が混合融和し一種の畫風を造成したものが藍本となつて我國に渡來し、それが諸大寺を莊嚴してゐたであらうと察せられるが、大寺の退轉は自然それらの莊嚴をも消滅させ、漸く法隆寺にその一例を残すこととなつたのがこの壁畫であると考へる。さるにてもこの壁畫が残つたが爲めに、かゝる畫風の當代に流行してゐたことが判明し、又それによつて初唐の支那壁畫がどういふ風のものだつたかを窺知せしめる史料ともなるのである。如何にも貴重なる存在ではないか。

支那に於ては、六朝末に梁の張僧繇が出て、當時凹凸法と唱へられた技法を用ひて健筆を振つた

ことが『建康實錄』に見えてゐる。そして實錄の著者許嵩がこの技法を天竺の遺法と記し、又世俗にこれを戎體の畫と呼んだ所をみれば、印度傳來のものたるに相違なく、更にその畫風を凹凸法と名づけたのは、印度流の壁畫が陰影暈染を驅使して畫象に凹凸あるが如き感（立體感）を起さしめたのに因由すると云はれてゐる。張僧繇の技法は『張家樣』とたゞえられて初唐に流行したといふから、法隆寺の壁畫もこの系統に屬するものではなからうか。

法隆寺の壁畫を見ると、どの畫象にも輪廓線が使用されてゐる。そしてその輪廓の描線は頗る細く、どこまでも同じ細さを以て描きつゞけてあつて、しかも甚だ力のこもつた描線であるから、鐵線を屈したるにさも似たりといふので『屈鐵線描』なる呼稱をもつてゐる。しかしこの輪廓の生じたと共に陰影暈染の手法が大に薄らいだことを認められるから、この點から推論して、この壁畫は印度の描寫方式が大に支那化しつゝあることを物語るものであるとの想定を立てることが出來ようと思ふ。

人も知るごとく、印度は強烈なる太陽の直射によつて明暗の印象を強く感受する國柄であるからこゝに陰影暈染の技法が發達するのは當然の事象である。しかし支那——わけても北支地方になると、それらの事情が非常に相違するのみならず、漢文化に屬する固有の畫法もあつて、自然その影

響が印度渡來の繪畫技術の上に及び、所謂國風なるものを造り出すことは必然の理であらう。かの印度で造顯された佛像が裸體と見まがふ薄衣うすものを纏つてゐるのが、北上するに従つて次第に厚着となる傾向を有するものと同じ現象であらう。

要するに、法隆寺の壁畫は、前にも述べた如く、印度の畫技を基本とし、これに佛法流傳の途次で吸収した諸種の要素を加味し、支那に定着してからは大に漢文化との融合に力めて終に一畫風を創成するに至つた。然るにそれが支那では初唐の世であつて、當時我國としては支那の文物移入に熱心であつた折柄であるから、銳意これを移植して、諸大寺を莊嚴する用に供した時代の俤を見せてゐるものと考へてよいであらう。現在は壁畫模寫の大事業が始まり、我畫壇の精銳を抜いてその業に當らせることになつてゐる。私はその擔當畫伯の一人であり、壁畫に對して長く研鑽の勞を積まれた荒井寛方氏と面談するの機があつたので、左の二箇の質問を出したが

- (一) 壁畫の畫手は邦人か外來人か
(二) 畫面の構想は一人か數人か

同氏は(一)に對して、世界を漫遊して諸種の壁畫を観たが、それから推論すると、法隆寺のそれは外來人の手に成ると認めるを妥當とすると答へられ、殊にその骨相——就中眉の描寫に西域人の

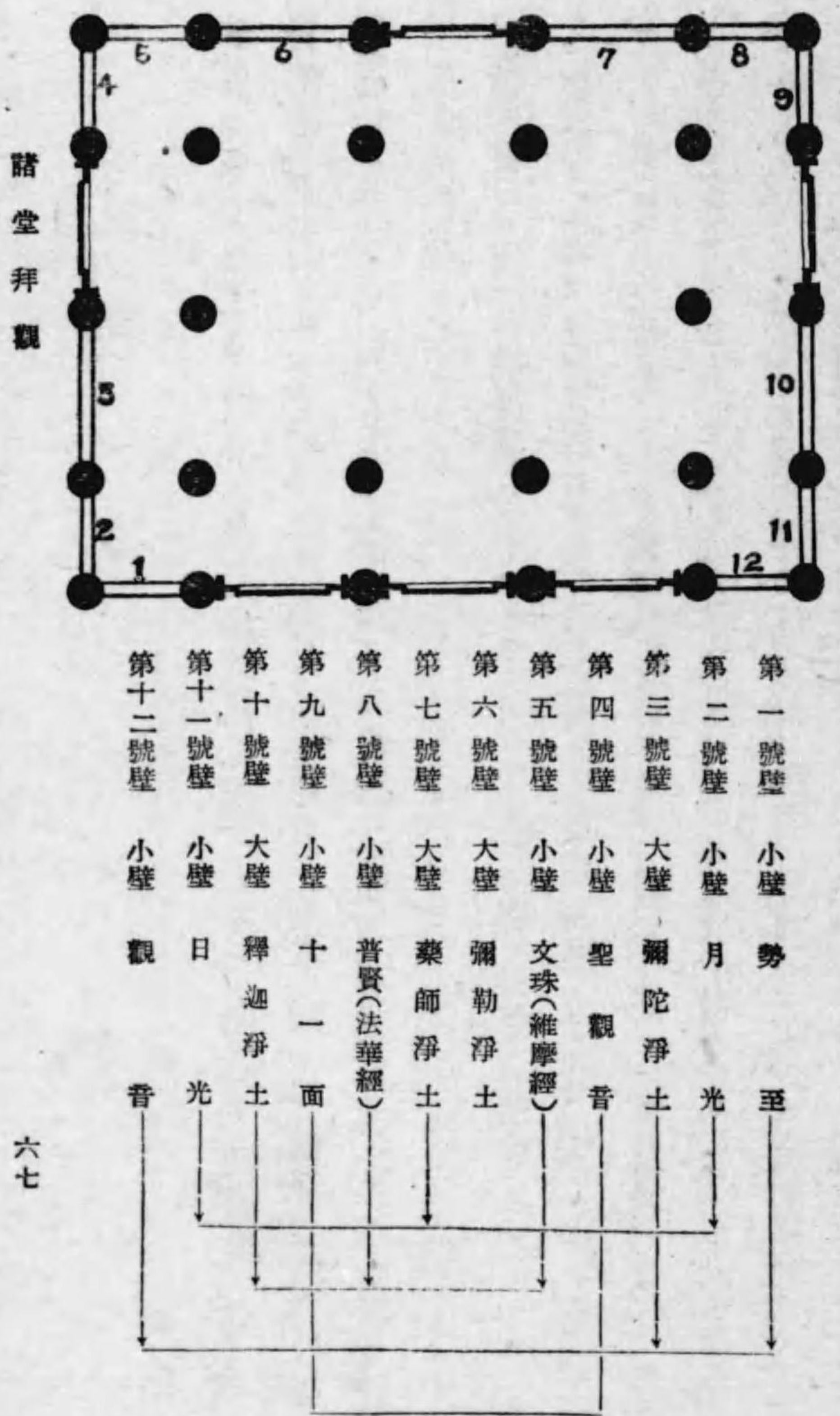
特徴を遺してゐると語られた。

而してこの話の旁證とならうと思ふのは、伊東忠太博士の法隆寺壁畫の佛・菩薩の面相に關する説である。同博士によれば、現在では露領トルキスタンに棲むウズベク族（トルコ種）の女子の骨相が法隆寺壁畫に現はれた諸尊の面相に酷似することを強調されて、この民族が未だ新疆方面に居住してゐた頃、佛法流傳に觸れて佛教信者となり、その頃の畫家に佛・菩薩像のモデルとして採用された——その流風が支那でくづされず、それをその儘に我國に渡した形見であると説いて居られる（伊東博士著『法隆寺』参照）。

又（二）に對しては、壁畫の構想は一人の成したものである。全體の調和が非常に甘くいつてゐるのは、一人の構想に出づることが最上の方法なることを示すものである、といふ答であつた。この點に就ては異論者もあるのであるが、私は四箇の淨土變相圖を整然と壁面に納めたところは、合議よりも獨裁の氣分の強く働いてゐることを認めるのである。勿論實際に畫筆を執つた畫家は相當の人數であり、又すぐれた畫技の所有者であつたらうから、自然筆法に個性を發露させ、それがこの壁畫の構想を一人ならずとする原因となつてゐるのでなからうか。

壁面の主位を占める四箇の大壁が淨土變相圖なることは論を要しないが、さてそれが何佛の淨土

なりやに就ては、西方彌陀淨土を除いて、古來定説がなく、従つて諸説區々であつたが、多年この研究に没頭された福井吉郎氏が『日本上代文化の研究』中に、同氏が到達された結論を示して居られるから、これを拜借して左に掲げることとする。



諸堂拜觀

三、塔 婆

六八

層を重ねること五層、總高一百五尺、二重基壇の上に立つてゐる。基壇の下部は花崗石を用ひ、上部は床面、羽目石共に松香石を不規則に張りつめてゐること金堂と同じい。軸部方三間。外廻りに裳階(廂)が附加されてゐることも金堂と同じい。軒の出が深く、屋根の勾配がゆるい曲線をなしてゐる姿は實に美しい。

我國の塔婆中でも、形態の完備したものを求めると、この塔婆と薬師寺の東塔とを推すべきであらう。薬師寺の東塔はその構想の奇想天外的なる點を歎賞されるのであるが、この五層塔婆は安定感の上から觀て最上の構成たることを稱讚されるのである。前にも遞減率の項で述べた通り、塔婆はその細長い塔身を天空に向つて聳え立たせてゐるのである。従つて觀る者をして、それが倒れはしないかといふやうな感じを起させるやうでは落第である。こゝに於てか、安定感を確保させる立場から、各層に適度の遞減率を加へて、塔婆に對する不安の念を一掃させようと試みた。そしてその最も成功したのが法隆寺の五層塔婆である。層々上に向つてすばまりゆく姿は、初層の踏張りを確固ならしめ、外界からの如何なる侵害にも對抗し、斷然動くことなきを示して人意を強からしめ

てゐる。しかも上部へすばまりゆく結果、軸部が次第に狭まつて、初層三間の壁面に使用されてゐる斗組が第四層に至つて置きようが無くなると、二組の肘木に一個の斗を据ゑてこれを處理し、第五層となつて愈々狭くなると、思ひ切つて柱間を二間に減じてこれを處理するといふ風に、奔放自在の手腕を發揮して何等屈託しないことを示した點は特筆大書すべきものである。

若しそれ強いて非難を加へてみれば、その塔身があまりに低きに失することである。しかしこれは建初からの姿ではないらしい。天平の緣起資財帳には

塔壹基 五重。高十六丈。

と記してゐるのに、現在の塔身は十丈五尺しかない。これでは五丈五尺といふ大差を示すので、さすがの喜田博士も『六』は草體の『三』を誤寫したのではないかとの折衷説を持ち出された程である。假にその説を採用するとしても、なほ三丈五尺の差が存するから、如何にそれを扱ふべきやの疑問が残る。しかしこれに對しては、岸熊吉氏(法隆寺保存工事々務所長)が奈良縣技師時代に調査された報告論文を借用すれば、喜田博士の折衷説程度の差をカバーすることが出来るのである。詳細を知りたい人は、夢殿第十卷に載せた『法隆寺五重塔に關する復原的考察』と題する岸氏の論文を一讀されよ。それにはかなり、詳しい數字も出てゐるから讀者の了解を期待し得ると信ずる。

大抵の人は氣がつかないであらうが、塔婆の組勾欄に限つて腰組を有つてゐないのである。これは金堂や中門のごとく當然腰組を有つてゐたのであるが、塔身切り縮めの犠牲となつて姿を消したのである。然るに先年三經院の修理に際し、天井裏に勾欄腰組用の地覆ぢふくの古材が残つてゐたのを見出され、それが今の塔婆の幾層目かの勾欄にびつたりと當てはまり、しかも人字型の割束をさしこむ穴まで判つたので、塔身切り縮めの立派な旁證となつてゐる。

【空洞問題】塔婆の心柱に就ては、先年それが掘立式なることが發見されて、一時學界を賑はしたのであつた。現在の初層内部の構成は、心柱の四方に須彌山と呼ばれる粘土の作り物があつて厚く蔽はれてゐるから、心柱がどうなつてゐるか不明であつたが、大正の末年に心柱の眞下ましもに當る部分に空洞の存することが發見され、研究の結果、それは建初の設計に心柱を掘立式としたが爲めに永年の間に土中にうもれてゐる部分が腐朽するに至つたのである。然るに何れの世かの修理（多分元祿の修理）の際にその腐朽した部分を取り除き、心柱を切り縮めて、その下底を現在のごとく基壇面に布置した石の上に据ゑ、その石の下は空洞の儘として残されたのであつたことが判つた。

心柱が掘立式になつてゐるといふことは誰もが思ひよらない方式であつたので、早速學界の問題となり、その理由を闡明せんとしていろいろの説も出たが、首肯せしむるに足るものなく、その中

でもこれならばと思はれたのが、天地根元造りの思想に因由するとの説であつた。關野貞博士でさへも、佛教美術第十三冊『飛鳥藝術の研究』の中で

心柱を掘立てにすることは支那にも、朝鮮にも無い。是れは聖德太子が特別の思召にて、古來底津磐根そこついはねに宮柱みやはしら太知り立てるといふ傳統的方法を用ひられたのであらう。普通心柱は直ちに礎石の上に立てるのであるが、太子は之を多少不安に思ひ、我古來の慣例により、深く地中に埋め立て以て心柱の堅牢を期せられたものと思はる。是れ亦太子の獨創的御意志を窺ふことが出来る。

と述べられて、とかく法隆寺の謎といへば日本民族の獨創力を誇るの料とするか、又は聖德太子の叡智に歸するを定石とする筆法を出して居られるのである。

然るに石田茂作博士が前年朝鮮扶餘（百濟の舊都）軍守里廢寺址の發掘に従事された際、その塔址を検討して心柱が掘立式なることを發見されたので、掘立式必ずしも我國專賣のものでなく、あの時代に於ては、朝鮮のみならず、恐らくは支那に於ても、かういふ立柱の方式が流行し、それが我國にも移植されて、法隆寺にその面影を遺すことになつたといふ次第である。すべて物事は氣なく研鑽を積むべきものであることの實物教育として玩味すべき事象であらうと思ふ。

初層内陣の安置佛に就ては、天平の縁起資財帳に

合塔本肆面具壻

一具涅槃像土。一具彌勒佛像土。

一具維摩詰像土。一具分舍利佛土。

右和銅四年歲次辛亥寺造者

七二

とあつて現在の群像配置を和銅四年の創始と誌してゐる。而して群像は上掲割書に示す如く、東面に維摩詰像（維摩經所說『文殊・維摩不二法門問答』の狀景）を、北面に釋迦涅槃像を、西面に分舍利（大般若涅槃經所說『舍利八分』の狀景）を、南面に彌勒淨土を分置されてある。

一般には塔婆内陣の安置佛は四方四佛とするのを常則とするが、上代には、この塔婆のごとく、群像を安置する風が行はれたと見えて、藥師寺の東西兩塔には釋迦八相を因相・果相に分けて安置されてあつたことが藥師寺縁起に見えるゐる。

この塔婆は建初以來大小の修理を幾回も受けてゐるが、元祿九年の修理は最も大なるものであつたらしく、金堂日記に『再興新造の如し』と誌してゐる程で、人目を張らしむるに足る大工事であつた。従つて塔身の切り縮めのごとき思ひきつた處置はこの機會に行はれたのであらう。その相輪のごときも建初のもの如何に高雅なものであつたであらうかと想像されるが、これも這般修理の際に一新されたものと見るべく、露盤に鑄出された三ツ葵の紋章が雄辯にこの間の消息を物語つ

てゐるではないか。

因みに、伊東忠太博士の調査によれば、金堂をはじめ、中門その他の建物に於て、荷重をうける箇所は必ず狂ひを見せてゐるが、塔婆だけは少しも狂つてゐない——といふことである。これによると、塔婆の元祿修理は一應解體して大鉈を加へられたものらしく、従つて建初の姿は少からず失はれてゐるものと想はなければならぬ。

自餘の諸建築とそれらの内容

はしがき

本冊の冒頭にも述べてあるやうに『法隆寺案内』なるものは、本邦に於ける——否、世界建築界に於ける唯一無二の遺構たる飛鳥建築を叙述すれば、その使命の大半を了へたものと見做してよいと考へる。しかしこの寺は聖徳太子の御遺徳にも因由しようが、その位置が偏在して居つた上に、寺自身も學問寺の本領を堅持して無慾恬淡、他の大寺の如く、勢力の伸長や利益の争奪に浮身をやつさなかつたが故に、世事の煩累から脱することが出来て、兵燹や掠奪の厄難を蒙らず、よく主要堂宇の原態を維持し來つたことを幸慶とするのである。

黒板勝美博士が『日本の美術遺品は法隆寺に於て飛鳥から江戸時代まで揃つてゐる。日本美術の保存には法隆寺だけ完全に保存すれば足りる』と極言された程に、飛鳥建築を除くとしても、奈良以後の各時代を代表する優秀な建築物をはじめとし、その内容を成す佛像、莊嚴具、經典さては樂器、什物等、國寶指定に屬するもの約二百點を算するといふ盛大さであるから、飛鳥建築とその内容を拜觀して、なほ時間に餘裕のある人達の巡歴の参考に資するため、以下に先づ主要堂宇（※印

は國寶指定建造物)を列擧し、更に進んで各個建築物の様相とその内容に就て略説する。

奈良時代

西院 經樓 ※

食堂 ※

東大門 ※

東院 夢殿 ※

傳法堂 ※

平安時代

西院 鐘樓 ※

大講堂 ※

鎌倉時代

西院 聖靈院 ※

三經院・西室 ※

西圓堂 ※

上御堂 ※

食堂前細殿 ※

新堂 ※

東院 地藏堂 ※

禮堂 ※

繪殿・舍利殿 ※

廻廊 ※

鐘樓 ※

宗源寺四脚門(勸學院表門) ※

室町時代

はしがき

西院 南大門 ※

大湯屋

大湯屋表門

興善院持佛堂

東院 南門 ※

四脚門(西門)

北室院本堂 ※

北室院唐門(表門) ※

桃山時代

西院 西園院客殿

西園院表門

東院 律學院

江戸時代

西院 西大門

護摩堂

上土門

綱封藏

實相院棟門

興善院棟門

東院 北室院一切經藏

北室院太子殿

以上の如くであるが、以下これらのうちの主要堂宇の概要と、その安置佛像とについての概説を試みよう。

西院

六

今こゝに『西院』と題して法隆寺の本體を書かうとするのであるが、この際を以て一言して置きたいことがある。それは

由來法隆寺と稱へられる地域内には二個の建築群があつて、それをその所在の位置により、一を東院と呼び、他を西院と稱へてゐる。しかしこれは後世に發生した稱呼——つまり便宜上附與され稱呼たるに過ぎないのであつて本來の名稱ではない。いま呼びならはす西院が法隆寺それ自體であり、東院は上宮王院と呼ぶ別寺である。即ち前者と後者との間には建立年代にして約百三十年の隔りがあり、その建立の由來も全然別種のものである。たゞ兩者につながりを有つものは、兩者共に聖德太子とのゆかり深く、しかもその建立位置が隣接してゐるのであり、その上に上宮王院が法隆寺の管理に屬してゐる關係上、自然兩者を一體と見做す傾向の生ずるは免れないことであつた。

要するに、現在に於て、法隆寺なる寺號を東西兩院の汎稱なりと解してゐる人達に對して、その本質を明かにしておく必要を認め、敢てこの言を費した所以である。

大講堂

大講堂の創建については種々問題がある。天平十九年の緣起資財帳に講堂の記載がないから、その後建造されたものと思はれる。法隆寺別當次第によれば、延長三年に焼失したことが記されてゐる。そしてその正暦元年の再建について古今目錄抄は

次講堂者。昔堂焼失。故其時別當觀理僧都。北京法性寺或云普明寺云寺當寺莊以近江莊替請彼寺所造此寺也。

と記し、近江にある法隆寺の莊園を以て普明寺の建物と交換し、それを移建したものであると云つてゐるが、最近の修理によつてみると、この移建の形跡は認められなかつたから、目錄抄の記すところには多少の疑惑がもたれるのである。しかし様式的には現存の講堂が藤原期の建築であることは疑はれない。

先學の研究によれば、延長焼失の講堂は今の堂よりも前の方にあつた。そして今の講堂の位置は北室、或は食堂の位置に相當すると云はれてゐる。従つて吾々は創建法隆寺の伽藍景觀を考へるに當つては、現存の講堂をもつと前面に押し出して想像しなければならぬ。

なほ足立康博士の説によれば、現講堂の建立規模は桁行八間であつたが、慶長修理によつて西端一間の増築を見るに至り、現在の形態となつたと云ふことである。

最近の修理は江戸時代の修補部分を一擲して全構を美しく明粧した。

桁行百一十一尺一寸餘、梁間五十四尺二寸餘、入母屋造、本瓦葺、二軒、大斗肘木造の法隆寺最大の建築である。戸口は正面中央五間、兩脇南端の間、背面中央一間に兩開板扉を設け、他の側柱間はすべて白亜塗壁である。内部は土間瓦敷、天井は周圍一間通りの外陣を化粧屋根裏となし、内陣は組入天井である。

内陣後半に松香石の石築須彌壇を設け、壇上に薬師三尊及び四天王立像四軀を安置してある。何れも藤原初期の優作で、共に國寶に指定されてゐる。殊に薬師三尊は光背、臺座共に完備した堂々たる尊像である。

なほこの堂の解体修理に當つて正厩に現宇が營まれる以前の建築の柱礎の位置並びに須彌壇の一部と認むべき遺構を發見して學界の注意を惹いた。

鐘樓、經樓

天平十九年の資財帳に

樓貳口 一口經樓。長三丈二尺。廣一丈八尺。
一口鐘樓。長三丈二尺。廣一丈八尺。

とあり、經樓はこれに記載せられたものであるが、鐘樓は延長三年講堂と共に炎上し、その後再建せられた藤原初期の建築である。しかし鐘樓の再建はよく舊規を踏襲して行はれたので、鐘樓、經樓共に屋蓋の形狀(切妻造)、妻飾(二重虹梁蛙股式)、軒組、軸部の狀態等の構造形式や規模の相似た様相を有つてゐる。しかしこれを細部に亘つて比較すると種々兩者間に相違を發見するが、これは天平と藤原初期との建築様式の變位を吾々に示教するものとして興味が深い。次にその變位三四を表示してみよう。

	經樓 (天平)	鐘樓 (藤原初期)
柱	エンタンスを有す	エンタンスなし
斗拱	肘木に簷縁りあり	肘木に簷縁りなし
丸桁	断面圓形	断面橢圓形
虹梁	力強き反りを有し、鼻の上端は水平である	反り少なく、殆んど水平で、鼻は外上りである
蛙股	肘木を伏せたやうな形狀で、唐招提寺講堂のものと似てゐる	所謂板蛙股

かゝる樓閣式の經樓、經樓には他に鎌倉の作例として唐招提寺の經藏（鼓樓とも云ふ）がある。建築の形式の上からも注意すべきものである。

なほ鐘樓の梵鐘は無銘であるが、上下帯に忍冬唐草文を配し、撞座の蓮花文も美しく、天平鐘として認められてゐる。總高六尺一寸六分、口径三尺九寸、鐘身四尺五寸二分、笠形の高さ三寸八分、龍頭の高さ一尺二寸六分である。

聖靈院東室

この寺の僧房は資財帳によれば四棟あつたやうであるが、現在は東室の後身である聖靈院東室と西室の後身である三經院西室の二棟とを殘すに過ぎない。聖靈院東室は廻廊のすぐ東に、南北にわたる堂がそれで、いま桁行中央の馬道を以て、南を聖靈院、北を東室と呼ばれてゐる。聖靈院の創設は、天仁から保安までの頃に、東室の再建に當つてその南端を改造し、聖德太子の尊像を祀つたことに始まる。尤も太子の聖像を奉安することはそれ以前から行はれてゐたもので、その初めは勸學院に於て行はれ、一時綱封藏に移されたこともあつた。聖靈院現在の建築は別當記に
弘安七年甲申聖靈院新造云々

とあつて明白である。恐らく棟續きである東室もこの時に造替せられたものであるが、中世の修補が烈しく、殆んど全部新しく變つてしまひ、骨組の極く一部と北妻ぐらゐに稍、古式を止めるに過ぎない状態となつてゐる。従つて東室は國寶指定から除外されてゐる。

聖靈院の規模は桁行七間、梁間五間（東室は桁行十一間、梁間四間）單層切妻造、本瓦葺、正面に深さ一間の檜皮葺の廂を設け、更に一間の向拜を附して木階を覆うてゐる。この向拜廻りは桃山以後のものであるらしい。斗拱は、聖靈院は平三斗、東室は舟肘木である。

外圍ひは前面總薮戸、側面には薮戸と兩開板唐戸とを用ひる。内部は後方中央方三間を内陣、その兩側を局とし、正面の深さ二間を禮堂とする。内陣、局、禮堂の三方の境には引違格子戸をはめてゐるが、禮堂と内陣の境は三間持放しで六枚建となつてゐる。これらの上部欄間は吹寄菱格子、天井廻りの小壁には横連子を入れてある。そして内陣奥には造りつけの須彌壇と同じく宮殿風の厨子がしつらはれてゐる。兩者共に黒漆塗に飾金具を打つた見事なもので、壇には勾欄を附し、中央は木階五級、昇勾欄がついてゐる。厨子は方柱の面取、柱上に三斗を組み、中央に軒唐破風を構へてゐる。この軒唐破風は現在鎌倉期の軒唐破風として信頼し得る唯一の作例を吾々に示すものとして重視されてゐる。

唐破風は棟に獅子口を載せ、内に蛙股を入れてゐるが、この蛙股はまた秀抜な作例として知られてゐる。

この直截な風格と優麗な技術をもつた厨子の内にこの堂の本尊とする聖徳太子の尊像が納められてゐる。即ち中央に聖徳太子像を安置し、左右に山背大兄王、茨田王、殖粟王、慧慈法師の四脇士を納めてゐる。太子像は御年四十五歳攝政の御影と傳へられ、束帯の坐像で、保安二年の敬造と云はれてゐる。太子の御影中で最も技巧の正しいもので、尊容は叡智と威嚴とに満ちてゐる。體內佛には奈良時代の金銅觀音像が納めてゐる。脇壇の脇士像も同時の作と見られるが、いづれも微笑を含んだ容貌を見せて、この太子御影とは對蹠的な表現法を採つてゐるのを珍とする。山背大兄王は如意を捧持し、殖粟王は劍を帯びて念珠笏を持ち、茨田王は七星劍、慧慈法師は衲衣を着し栴香爐を持つてゐる。慧慈法師は高勾麗の人、太子經文の師であり、他の三體は太子の王子である。以上の諸像は共に國寶であるが、他にこの堂には如意輪觀音半伽像、地藏菩薩立像の國寶像がある。前者は臺座に永仁三年の墨書を有し、二臂如意輪の珍らしい形態を持つ藤原像、後者は平安初期のもので、白毫に眞珠を入れた精練な白檀像と拜される。

三經院西室

三經院西室は前述の如く西室の後身で、これも中央に馬道があり、以南を三經院、以北を西室と分かれてゐる。廻廊の西に南北につらなる一棟がそれである。三經院は勝鬘、維摩、法華の三經を講讀するところ、創立の年代は未詳であるが、平安の末には已に記録に見えてゐる。現存建築の建立年代は別當記寛喜三年の條に

同年四月八日西室建造、木造同十八日、柱立、同廿四日棟上、勸進聖人尊圓、施主比丘尼常任、但南端七間三面、南ハ號三經院矣。

と記されてゐる。又棟木に『法隆學問寺西室棟上寛喜三季辛卯初夏廿四日庚辰云々』の墨書があつてこれを確證してゐる。

規模は、三經院は桁行七間、梁間三間、西室は桁行十二間、梁間四間である。屋蓋の形狀は聖靈院東室に同じい。但し斗栱は大斗肘木、軒は一軒繁檼（聖靈院は二軒繁檼、東室は一軒）で、三經院の向拜もやはり桃山以後の補加であるらしい。

三經院の母屋は總圓柱（但し向拜は角柱）、外圍ひは殆んど全部明障子を立て葺戸を吊り、一部に板唐戸や連子窓を設けてゐる。内部は疊敷。二列の圓柱で天井は自ら内外陣の如く分れ、中央一帯に組上小組格天井、廻りは小組格天井、奥に須彌壇を造つてゐる。

須彌壇は木造、概ね黒漆塗に仕上げられてゐる。西室は内部角柱、疊敷、天井は棹縁天井であるが、この西室は僧坊建築の遺構として注意したい。僧坊の遺構としては、他に極樂院禪堂（元興寺舊北室―鎌倉時代、但し一部に天平の材を残す）、唐招提寺東室（建仁三年―但し一部に平安朝の遺構を存す）があるばかりである。

南 大 門

創立に關しては詳細を缺くが、寺域外廓の總門であるから、伽藍草創を餘り距らない頃に出来たであらう。屢々災厄に逢つて建て替り、現存のものは永享六年焼失して同十年に再興上棟されたものである。棟木に左の墨書がある。

上棟永享十年戊子十一月十九日……

又棟札一枚を存し、これによると慶長十一年に豊臣秀頼が片桐且元を奉行として修營を施した由が知られる。

三門一戸、單層、入母屋造、本瓦葺、二斗花肘木、拳鼻等によく室町氣分が旺盛してゐる。

食 堂、細 殿

食堂は天平、細殿は鎌倉時代の遺構である。しかし創建食堂の規模は天平十九年の縁起資財帳に長十丈二尺 廣五丈七尺 柱高一丈五尺九寸と見えて居り、現食堂の規模は

桁行七間 七〇、〇〇天平尺（現尺一九七、六三尺）

梁行四間 三三、〇〇天平尺（現尺一三一、一六尺）

であるから、これはむしろ資材帳の衆院屋壹拾口中に見える

貳口政屋 一口長七丈。廣三丈三尺。
一口長六丈八尺。廣一丈八尺。

に近いので、現食堂を政屋の後身に擬する説も行はれてゐる。そしてこれによれば、他の一口を今の細殿の前身建物であらうと云ふのである。

食堂は桁行七間、梁間四間、單層、切妻造、本瓦葺、斗拱は大斗肘木、軒は二軒である。

細殿は桁行七間、梁間二間、やはり單層切妻造、本瓦葺、斗拱は大斗肘木、軒は一軒で、兩妻のみが壁で他の柱間は開放の軽快な建物である。

食堂には堂内中央に鎌倉期の須彌壇がある。元の須彌壇の上にあつた厨子は今經樓に移されて勸勒僧正の像を安置してある。いま食堂安置の佛像は左の三躰で、何れも奈良時代の造顯、國寶に指

定されてゐる。そしてこの後壁には文永五年の墨書がある。

本尊薬師如来坐像 塑像？（但し國寶指定は木造となつてゐる）

塑造梵天帝釋天立像

塑造四天王立像

綱 封 藏

食堂・細殿のすぐ西側に立つてゐる板倉式の倉である。極めて風蝕された材料で造られてゐるが、これは江戸時代に古材を以て改造されたからである。しかしこの寺に會て存在したといふ三十三藏の唯一の遺構と傳へられる。内部は三室に分れ、各室に多數の國寶佛や什物を收藏してゐる。但し綱封藏自體は國寶指定はうけてゐない。

上 御 堂

大講堂後面の小高い丘の上の堂がそれである。舍人親王の本願によつて、永業禪師の創建したものと云はれる。

永祿元年四月十三日暴風によつて倒れ、本尊や脇士を講堂に移したことがあつた。いまの堂は應

長から文保の頃にかけて再建されたもので、規模は舊礎を踏襲してゐると云はれてゐる。

桁行七間、梁間四間、單層、入母屋造、本瓦葺、軒は二軒、斗拱は三斗で、中備に間斗束を配してゐる。梁間の柱間で、中央二間が兩端間より著しく廣いのは、舊規を踏んでゐることを如實に現してゐる。

内部は土間、瓦の四半敷で、周圍柱間各一間通を外陣とし、天井は内陣を折上組入天井、外陣を化粧屋根裏としてゐる。

内陣後方の三間に木造の須彌壇を置き、本尊木造釋迦三尊、木造四天王立像を安置してゐる。前者は藤原初期であるが、後者は吉野時代の作で、それ／＼の首を抜けば、その頭に當る部分に次の墨書がある。

奉安置

法隆寺上堂

施主尼法念房

木師法橋寬慶

繪師法橋專英

西 院

文和四年乙未十二月三日

(持國天)

堂の出入口は正面中央に五間を、兩側は南端の一間を、背面は中央の一間を開き、どの出入口にも兩開棧唐戸を吊つてゐる。

建築の主要は屏構の他は所謂和様に終始し、木割も太く、簡潔で整備した建築であるが、見るものをしてゆつたりとした餘裕を感じしめないのは惜しい。

地藏堂

堂の所縁と建築年次とはその棟木に次の如く記されてゐる。

奉造立一間四面御堂一字 願主權律師定弘敬 大工平宗景

爲先師並二親等恩所出離得脫自他滅罪頓生菩提□□所捨奉安置地藏薩埵也此菩薩者彼居法雲地

□被恆法界利益甚深普及濟度於□之群衆

誓願最勝殊施饒益於無佛之世界然則法主□□德……………來九品□□□矣 應安五年壬子八月廿

二日

その後永正十五年に至つて屋根檜皮葺を瓦葺に改め、又天正十三年に修補のあつたことが須彌壇の後壁に詳しく記されてゐる。

應安五年と云へば鎌倉も極末期の建築であるから、木割も繊細であるが、なか／＼瀟洒な愛すべき小堂である。殊に正面に並ぶ三個の藝股は藤の花、葉、蔓、枝を巧みに圖案化した彫刻を持ち、その細かい技巧は秀抜である。

西圓堂

西室の西北の小高いところにある八角圓堂で、世間には『峯の薬師』で通つてゐる。

堂は橋夫人の本願、養老二年の草創である。その後永承年間に破壊し、建長元年に再建されたのである。最近の修理に於て前面の唐破風・千鳥破風と重なつた不愉快な向拜を撤去し、別に堂に恰好した向拜が新設されたので、木割の雄大な鎌倉調の姿態を再現して面目を新にした。斗拱は三斗、中備に間斗束を配し、軒は二軒である四方は兩開板扉、四隅を連子窓としてゐる。

内部は瓦敷、内陣より外陣に亘つて木造二重の須彌壇を設け、中央に奈良期造顯の丈六薬師如來の乾漆坐像を安置してゐる。これは乾漆像としても貴重な作例で、臺座、花脚、敷茄子等にも特殊

な意匠が見られる。但し光背は後補で、これには次の墨書がある。

法隆寺西圓堂

抑々此以佛修營者律學長藕故

行尋大法師□後終焉之刻且爲

臨終正念往圓圓極樂寄進用途

伍拾貫事而後室門弟俊賀

大法師且爲果彼素志以□

重之意願連疾致□功了

千時弘安六年歲次詠月
癸未

大工北京近衛殿佛師源□□

越前國國國國

その他に木造十二神將立像(内二軀藤原、十軀鎌倉)、木造地藏菩薩立像(平安初期)、同千手觀音立像(藤原)等の諸尊が客佛となつてゐる。

なほ堂の修理前には外壁の内面に數百口の刀劍や鏡鑑を懸けてゐたが、そのうちには多數の國寶

的逸品があつたことが調査によつて判明した。その詳細を日本古代文化研究所の報告書によつて公けにされてゐる。

新 堂

新堂は西園院客殿、即ち現法隆寺事務所の北隅にあつて、廊下でこれと連絡するやうになつてゐる。方三間、單層入母屋造の小宇で、前にさゝやかな園池をひかへ、愛すべき風情をもつてゐる。建立年代はその棟札に

新堂院棟□弘安七年甲申七月二日勸進聖人□覺大工橋國綱

とあつて明瞭である。その他に大永、文祿、元祿等の修理棟札を存し、それらの年次に修補をうけて今に至つたことが分る。

屋根は現在棧瓦葺であるが、古今目録抄に

(築地) 埴地之北浦在新堂、萱葺、彌勤本佛、在磬一口、在法隆寺新堂銘云々

とあるから、もとは萱葺であつた。いま棧瓦の下地に檜皮葺の形迹を留めてゐると云ふが、面取角柱に舟肘木を用ひた木割の繊細な持佛堂であるから、このやうな植物性の葺材料の方がこの堂の景

觀としてふさはし。

三方に縁をめぐらし、正面中央は兩折兩開板唐戸、左右連子窓、北側は東端兩折板唐戸、次は蔀戸、次の間は背面から南面にかけて壁となり、このうち南面東端の客殿に續く一隅は引込板戸となつてゐる。内部は拭板敷、天井は小組、格天井、格縁は大きな唐戸面取りである。西の一間通りに須彌壇を設けてあるが、その勾欄や格狹間はなく、味のある作品である。壇上には本尊木造薬師三尊(國寶・藤原時代)と四天王立像(同)とを安置してゐる。三尊のうち脇士日光菩薩の臺座には左の墨書銘がある。

弘安七年甲申八月

新堂院本尊薬師佛之脇士座也

佛師定慶法橋生年卅九修復之

并西園堂薬師光同作也

又月光菩薩にも左の墨書銘がある。

弘安七年甲申八月

新堂院東尊薬師脇士座也

佛師越前法橋定慶修復之

護摩堂

西園院の前にある江戸時代の建築である。建物はまだ國寶になつてゐないが、本尊不動明王及び臺座に『康暦二年舜慶作清玄彩色』の銘ある二童子立像、並びに胎内に『應安八年三月慶秀等造立』の銘ある木造弘法大師坐像は、共に國寶に指定されてゐる。

東大門

この門が西院と東院との境界である。先年修理を加へたばかりであるので、宛も新造の如くまだ塗色も鮮かである。その修理に際して當初の部材番付が発見せられ、それによると、この門はもと南面して建てられてゐたことが判明した。従つて中世何處からかこゝへ移建して東大門の用に當てたわけであるが、今のどこに在つたか、その原初の所在は知られない。切妻造、三間一戸の八脚門で、規模は

桁行三間 三〇・九六一尺(三三・〇〇天平尺)

西院

中央間 一二・五七七 (一三・〇〇天平尺)
 兩脇間 九・一九二 (九・五〇天平尺)
 梁行二間 一七・四一六 (一八・〇〇天平尺)
 各一間 八・七〇八 (九・〇〇天平尺)

であるから、天平十九年の資財帳に見える僧門三口とあるもの、即ち

一 長三丈四尺八寸 廣一丈
 一 長三丈 廣一丈七尺
 一 長三丈五寸 廣一丈六尺

の何れにも該當せず、この門の建立が天平十九年以後にあるべきことを思はしめる。

柱にはエンタシスがあり、斗拱は雄健な三斗、これに二重虹梁蛙股式の小屋をのせてゐる。ここではこの蛙股の形式に注意すべきである。吾々はこれによつて割束(又は人字形蛙股)から板蛙股が發達する這般の問題を極めて端的に教へられる。また天井は三棟造となつてゐる。奈良時代の門としては、他に東大寺の轉害門もあるが、それは當代の雄健な風格を代表し、これは巧緻なる技風の作例を代表しつゝ、共に兄たり難く弟たり難いものである。

東院

東院、正しくは上宮王院と云ふ。東院とは法隆寺寺地の東邊にあるを以て呼ばれる名稱である。東院の草創は東院縁起に

小治田天皇即位廿九年歲次春二月廿二日夜半、太子五年四十九、在於斑鳩宮遷化矣。爰人歷二千古、世移萬年、定觀之殿、毀而無餘基、利生之閣、荒而爲岳墳。沉々金地、積萬獸之曝骸、幽々寶庭、生千齡之緣苔。於是大僧都法師位行信、觀斯荒墟、流涕感歎、遂以奏聞春宮坊、以天平十一年歲次己卯夏四月十日、即令河内山贈太政大臣、敬造此院。

と見え、大僧都行信が聖德太子斑鳩宮の廢墟に就いて太子を追慕するのあまり、發起した伽藍であると傳へられてゐる。

斑鳩宮とは、聖德太子の御住居として推古天皇九年に造營せられ、同十三年竣成してお遷りになり、二十九年(又は卅年)この宮に於て薨去あらせられた。その後も太子の王子山背大兄王以下御一族引續きお住ひになつて居られたが、皇極天皇二年蘇我入鹿の暴逆によつて燒失したのである。日

本書紀はこれを次の如く傳へてゐる。

(用明天皇紀) 元年既戸皇子……此之皇子初居_二上宮_一。後移_二斑鳩宮_一。

(推古天皇紀) 九年春二月皇太子初興_二宮室于斑鳩宮_一。

十三年冬十月皇太子居_二斑鳩宮_一。

二十九年春二月己丑朔癸巳夜半既戸豐聰耳皇子命薨_二于斑昂宮_一。

(舒明天皇前記)

是時推古天皇崩_レじて

山背大兄居_二斑鳩宮_一……

爰群大夫等受_二大臣之言_一、共詣_二于斑鳩宮_一、使_二三國王、櫻井臣、以_二大臣之辭_一、啓_二於山背大兄王_一。

(皇極天皇紀)

二年十一月丙子朔、蘇我臣入鹿、遣_二小德巨勢德木臣_一、大仁土師婆婆連、掩_二山背

大兄王於斑鳩宮_一、巨勢德太臣等燒_二斑鳩宮_一。

東院は先年來一掃的に全伽藍の根本修理に着手してゐるが、繪殿・舍利殿・傳法堂の地下から點々として太子斑鳩宮の殿舎の址とおぼしき柱穴が發掘されてゐる。まことにいみじき極みである。

さて東院伽藍は夢殿によつて名高いが、夢殿はこの院の正殿である。これを廻つて廻廊があり、

廻廊の南面には禮堂、北面には繪殿・舍利殿と呼ばれる堂宇が配置されてゐる。禮堂の前面には南門をひらき、繪殿・舍利殿の後面には傳法堂が位する。廻廊の西面には西門が置かれ、この西門を入ると廻廊との中間北側に鐘樓がある。

夢 殿

夢殿と云ふこのいみじき呼び名は何によつて稱へられたであらうか。太子傳曆に

及_レ製_二諸經疏_一也、若有_レ滯_レ義即入_二此殿_一、常自_二東方_一金人到、告以_二妙義_一。

とあることに據るものと云はれてゐるが、この呼び名の正確な記録に於ける初見は天養の三綱奏狀に載せたそれである。天平寶字五年の東院資財帳には

瓦葺八角佛殿壹基

間別一丈六尺
五寸在露盤

と見えて屋裡、古くは正堂又は聖堂等の名が用ひられてゐたやうである。

この建物はその名がいみじく又うるはしいばかりでなく、建築の形態もその名にふさはしく美しい。正に天平建築中の白眉であるばかりでなく、日本古建築中の壓巻である。

堂は創建以來屢々修理をうけて來た。殊に鎌倉期の修補は斗拱以上の構架に相當な手入れを施し

たやうであるが、しかしよく古式を保存してゐる。二重基壇の上に低平な軸部を組み、その上に八角八注の本瓦葺の屋蓋を載せ、その頂上には莊麗無比な露盤を飾つてゐる。軒の八隅には風鐸がつられ、明確な軒反りが碧空を截る。何といふ落着いた平靜さであらう。

屋上の露盤は金銅製で、八角の臺座上に蓮座を設け、それに寶瓶をのせ天蓋を開き、更に請花、寶珠を上げ、天蓋の各隅に風鐸を下げてゐる。そして寶珠の四方に火焰を附し、火焰からは光芒が放射されてゐる。凡そこの世にこれほど變化と格調とに富んだ工藝品があらうか。

堂の軸部を安定にみせてゐる事情の一つは柱の立ち方に大きな關係がある。即ちそれは柱が全部内部に傾斜して立てられてゐること(建築家はこれを柱に内轉うちまがびがあると云ふ)で、眼を定めて見透しをすれば、それは肉眼でも見られる筈である。精密な實測によると、隅で垂直線から約一寸轉まがんでゐると報告されてゐるが、柱にこの内轉うちまがびがあるといふことは、軸部がピラミッドのやうに各面が内側に傾斜した面で建ち上つてゐるわけであるから、この建物が安固たる落着を以て吾々に迫るのは當然である。かゝる慎重な用意を有することは、この造營にたづさはつた工匠達の技能の高いことを示すのみならず、聖徳太子への愛慕に捧げた熱情の現れとも考へられよう。軸部の外圍では四方を扉、四隅を連子窓れんじとしてゐる。扉は板扉で各面五段六列に金銅の七葉座を裝打してゐる扉を

配して内に入ると、床は石敷、中央に松香石の八角二重の須彌壇があり、その上の厨子にあのフェノロサの碧眼をみはらせた救世觀世音の靈像が奉安されてゐる。

天井は外陣けいじんを化粧屋根裏とし、内陣は穹窿形の天井を吊つてゐる。これは別當記に

建久四年癸丑四月七日始上宮五院天井造之同十九日造畢

と記した如く、鎌倉期の補加である。

では次に本尊救世觀世音菩薩の像について述べてみよう。これは天平寶字の資財帳に

上宮五身觀世音菩薩木造一軀金箔押

と録上され、古來太子御自作の等身像と稱せらる靈像である。古今目錄抄に

今世并昔日不知其體

と顯眞も記してゐるやうに、古來祕佛として尊まれて來たが、明治十七年の夏、政府の古美術調査囑託米人フェノロサの來寺によつて、初めて千古の尊容を白日の下に表はすに至つた。像は白布で包まれて居り、その白布はいくらほぐしても盡きず、終に百五十丈に及んで現じ給うたと傳へられてゐる。木造金箔押、高さ五尺九寸五分のこの尊容がさうした白布の中から取り出された光景は、まことに聖代の奇觀であつたと思はれる。像は楠の一木彫成で、寶冠と持物(寶珠)の水焰とのみに

金属が用ひられてゐる。總身は扁平ならず、とした美しい姿勢である。そして厥手形の垂髪が肩にかゝり、肩から斜めに胸を包む衣の褶は規則的に美しい流れをつくり、天衣は兩肩から前に垂れて膝のあたりで交叉し、その餘りは兩腕にかゝつて翻るが如くに外擴がりに鋭い錯狀を呈してゐるが、この外擴がりの錯狀の衣文はこの時代の彫像の顯著な特長である。

寶冠は銅製鍍金の唐草模様で吹玉を鏤め、それに瓔珞をつけた精巧なものである。寶珠形の光背は一枚板から彫刻され、中央に單瓣蓮花文を、周圍に忍冬唐草を、その外縁に火焰を配し、頂上に瑜祇塔を現してゐる。

これこそ日本彫像の精華である、つくづくと尊容を拜してゐると、その生きくとした眼、微笑の深ふくよかな頬と唇、あくまでも清朗な姿容の正しさ、額づく者をして法悦自ら來り、慈悲の暖かさに佛陀の世界に身を置くの感あらしめる。

救世觀世音とは眞にこの尊像に對してふさはしく附けられた御名である。しかし『救世』と言ひならばすのは太子妊胎の奇蹟譚に發した名稱で、太子傳補闕記、太子傳曆等に載つてゐる。即ち太子救世の大願の爲めに母后の夢に金色の僧となつて顯れ、そのまゝ胎内に宿つて誕生あらせられたと説かれるものである。しかしこの像の尊さはかうした因縁づけられた奇蹟譚を持出すまでもなく

救世の大慈は直接吾々の胸に迫るものがある。いまは春秋二季（四月一日—五月十五日、十月十五日—十一月二十日）に特別に開扉され、拜觀するの便が設けられてゐる。

前立聖觀音像も一木彫成、高さ四尺八寸の弘仁佛で、總身金箔を施されてゐる。なほ須彌壇上には東院草創の功勞者行信僧都と、貞觀年間東院の崩斜を悲しみ修營に結縁した道詮律師の坐像が左右に置かれてゐる。共に約三尺程の乾漆像で肖像彫刻として優れた作風を有つてゐる。因みに、行信像は天平、道詮像は貞觀の製作と云はれてゐる。

禮 堂

天平寶字五年の東院資財帳に

檜皮葺門二間 一長七丈。廣二丈一尺。
一長三丈。廣一丈五尺。

とあるうちの七丈門がこの禮堂創建の形態であつた。これは先年この建物の修理に際し、地下から當時の掘立柱の柱根が発見せられ、その由來を立證することゝなつた。

いまの建築は鎌倉に入つて寛喜年間に再建せられたものである。單層切妻造、本瓦葺、兩妻には廂を附し圓柱を用ひ、斗拱は三斗、又周圍に縁を繞らし、内部は拭板敷、天井は組入天井である。

規模は桁行五間(五十一尺五寸)、梁行四間(三十七尺三寸)となつてゐる。

繪殿・舍利殿

繪殿は一名武殿院といひ、舍利殿は御持堂とも呼ばれる。兩者合して一棟をなし、桁行七間、梁間三間、單層・切妻造、本瓦葺、周圍に縁を廻らした低平な建築である。繪殿はこのうち西の桁行三間、舍利殿は東の三間、中央一間は馬道となつて、この傳法堂に連絡する。

いまの堂は綱所日記に

承久元年二月二十日より西松尾寺勝月上人發願し二年にして成る

とあつて承久の再建であるが、東院草創に於ける形態は前掲東院資財帳に見ゆる檜皮葺參間のうち『一長七尺廣二丈』とあるものが、これに當るやうである。これは今回の修理に際し、地下から現はれた掘立柱根の配置がそれを示してゐる。そしていまの堂を見ると、梁間三間のうち、後の二間即ち内陣部の柱間二間は天平尺で二十尺あるから、この兩殿の内陣の示す桁行七間、梁間二間の規模が舊規を残してゐるわけである。

兩殿とも斗栱は平三斗、内外陣の境を板扉とし、天井は外陣が組入天井、内陣は小組格天井であ

る。さて繪殿に、その名の示す如く、いま内陣貼壁に太子傳の壁畫がある。しかしこの壁畫は古くからのものではなく、もとは五間の障子に太子入胎より葬送までの御一代記を描き、これに説明文を附加されたものであつた。これは世に『御障子五間略記』とも稱されるものである。製作は綱所日記に

延文元年二月より五月迄描き六月十六日に繪殿に渡り畫師攝津國大波卿住人奏政眞云々

と見えてゐる。ところがこれは明治十五年宮内省に獻納することになつたので、いまの繪をそのあとに掲げることになつたのであつて、この繪は天明四年彌勒院千範の本願によつて吉村光貞が模寫したものである。

舍利殿内陣の小組格天井は、中央から稍、後方の一部を二重の折上とし、その下に須彌壇を設け實に立派な鎌倉厨子を安置してゐる。この厨子には、天井に造進に關係した人達の名前を録した長久の墨書があり、貞治四年の製作であることが分る。この厨子の中には更に小さい厨子があつて、それに南無佛の舍利を入れてある。即ちこれがこの殿を舍利殿と呼ばしめる由縁である。厨子の須彌壇は格狹間に鳳凰の彫刻を入れ、中尊寺金色堂のそれを想起せしめる優秀なもので、當代のものとしては和歌山縣淨妙寺本堂の須彌壇と正に双壁である。

こゝにはもと貼壁に『六間障子繪』と稱し、東に漢高祖商山の四皓を招くの圖を、西に周文王淇濱に呂尚と邂逅するの圖を描いてあつた。筆者は寺傳土佐光信と稱してゐたが、やはり明治十一年宮内省に獻じ、いまのものは長谷川等眞描くところの模本である。

廻廊

創建の廻廊は天平寶字の東院資財帳に

檜皮葺廡廊壹廻 東西各十四丈。北十三丈四尺。南六丈四尺。

と見えてゐるが、いまのものは鎌倉期に再建されたもので、繪殿・舍利殿の再建に際し、多少北方に延長されてゐて、東西の廻廊は稍、これより長くなつてゐる。

禮堂、繪殿・舍利殿に於けると同様、修理に際して地下から當初の掘立柱根が發掘されてゐる。それによると、いまの廻廊は略、建初の位置に建つてゐるやうである。屋蓋は本瓦葺、屋根勾配ゆるく、軒は一軒、三斗組の簡素な、特にとりたて、云ふべき程の特徴をもたない建物であるが、各梁行虹梁の上に板蛙股を置いて棟木を支へさせてゐる構造は一寸注意を惹く作例である。

傳法堂

傳法堂は橘三千代夫人の住宅を移し建てたものと一部學者間に稱へられてゐた。これは天平寶字五年の東院資財帳に

瓦葺講堂壹間 長八丈四尺。奉納橘夫人宅者
廣三丈六尺。善湜師申奉納

とあるのを誤り解したもので、これは橘夫人（福山博士は廣岡夫人に擬せられた）が建築費を投じ當時上座であつた善湜が事に當つて建つたことを示すのみである。

しかし今回の修理によつて、この堂はもと五間の桁行をもつた住宅風の建築を移建し、これを七間堂に改築したものであることが明かになつた。かうなると従來文献的に傳法堂住宅説を主張して來た學者の勝利を意味するやうであるが、實はさうではない。文献的にあれを住宅の施入と解することはあくまで不當であつて、實物の研究がこの結論と一致したと云ふのは、これはまた別の問題である。

又傳法堂は行信が四人の弟子を住ませた學問所であると云ふ傳へもあつて、一に行信部屋とも云はれてゐる。なほ修理に際してこの堂の地下から斑鳩宮の舊構と見るべき柱穴を検出した話は前

にも一寸書いたが、なほ今後の研究の進捗するにつれて、何れその全貌が明かにされる日が来るであらう——ことを期して俟つものである。

堂は桁行七間、梁間四間、單層・切妻造、本瓦葺の軽快な建築で、斗拱に大斗肘木を用ひ、その上に二重虹梁・蛙股式の化粧小屋組が構築されてゐる。

内部は拭板敷、内陣に須彌壇を設け、その上には三個の天蓋が吊されてゐる。天蓋は何れも組入天井の形式のもので、格間・格縁等には極彩色で寶相花文様を描いてゐる。因みに、この天蓋には中世中宮寺から移入したものと云ふ傳へもある。製作は天平を下るものではなからうか。

鐘樓

袴腰のついた桁行三間、梁間二間の重層・入母屋造、本瓦葺の鐘樓で、鎌倉期の様式を有つてゐる。入母屋の虹梁、太瓶束に笈形を配した妻飾は慶長頃の修理に變改されたものらしく、もとは又首を用ひ、破風の立ち所も今より高かつたことが先年の修理に於て明かとなつた。斗拱は一手先である。

この鐘樓にかゝつてゐる鐘は奈良朝のものとして名高い。總高五尺四寸三分、口径三尺四寸七分、

南門

鐘身四尺二分、笠形の高さ三寸一分、龍頭の高さ一尺、全體の形としては、天平二年以後の鑄造と考へられる薬師寺の鐘に似てゐる。珍らしく縦帯の三縁のうち、中の線を有たないもので、撞座には實に雄大な複瓣蓮華を鑄出してゐる。追刻の『中宮寺』の三字を有することによつて、中世中宮寺に於て使用されてゐたことがあつたのであらう。

西門

俗に不開門、又は閉門とも云ふ。これはもと推古天皇宸筆の勅額がかゝつてゐたので、ふだんの通行を禁じてゐるのだと傳へてゐるが（従つて勅額門の名もある）、もとより信を措き難い。切妻造の八脚門で、室町初期の様式を有つてゐる。軒は二重の繁極、妻飾は二重虹梁・蛙股式である。

切妻造の四脚門で、南門と同じ頃の再建ではなかつたか。

二本の圓柱を中心に、前後に大面取の控柱をもち、脚長押を附し、頭貫には間斗束を立て、妻飾には板蛙股を用ひてゐる。斗拱は大斗肘木、軒は二重繁極、全體に相當木割は太い。床は花崗岩で

鼻み、控柱の礎石は大面取の特殊な繰出しがあり、扉下の唐居敷も立派な石で出来てゐる。

三八

北室院本堂

傳法堂の北裏にあり、東院に於ける三面僧房中の北室に當るものと認める。一陽集に永享八年及び明應三年上棟の二通りの棟札銘記を收めてゐるが、現在の東堂及び唐門は室町中期の様式を有つてゐる。

東堂は方三間、正面に一間の向拜をつけてゐる。柱は方柱面取、斗拱は三斗、一軒で疎極、向拜は吹寄、木舞裏、檜皮葺、今はこの上へ椽瓦を假葺にしてゐる。周圍には明障を立て葺戸を吊る。木割は繊細で、住宅風の輕快な建物である。柱には四隅に若葉や栗、たんぼ、楓、たにわたり等を配した美しい木鼻をつけてゐる。中備の間斗束は蕨束となつてゐるが、肩のところにはやはり桐、牡丹、糸瓜、雲、若葉等を彫り出し、向拜の彫刻意匠も面白く、虹梁や手挟みは前記の如き諸種の植物の彫刻を以て満してゐる。内部は拭板敷で、中央後方に唐様の立派な須彌壇がある。天井は折上格天井で、格縁は唐戸面を取り、須彌壇上のみ折上小組格天井となつてゐる。なほ背面中央間には兩折板唐戸がついてゐて裏縁に出られる。

北室院唐門（表門）

この唐門も東堂と恐らく同時の造立であらう。平唐門と呼ぶべき形式の門で、いま檜皮葺の屋根の上に更に椽瓦を載せてゐるが、これは勿論後の假設である。唐破風は伸びのいゝ形で、兔毛通は大分缺損してゐるが、非凡な味を有つてゐる。

宗源寺四脚門（勸學院表門）

宗源寺はいま勸學院となつてゐるので、この門も勸學院表門と呼ぶべきであらう。しかしこの地は古くは金光院が所在してゐたのであるから、門の造立は別當記に

嘉禎三年丁酉三月日金光院四足並築地始建造云々

とあるものを以て當てることが出来よう。

控柱の面は大きく、妻は板蛙股を以て飾つてゐる。屋根は本瓦葺、簡素な四脚門である。

附

錄

一、中宮寺の由來

夢殿の拜觀を了へて、傳法堂の裏を東に進むと門がある。これが中宮寺門跡の斑鳩御所である。五本の筋堀に格式をみせた比丘尼御所。その外景は大和といふよりも京都といふ感じがする。

しかし中宮寺は創建から今のやうな寺院ではなかつたのである。こゝからは四五町ほど眞東にある幸前さいぜんといふところに、いまも往昔を偲ばせる堂塔伽藍の址がある。奈良から法隆寺に通ふバスの幸前停車場の北西に池があり、その北に舊堂の土壇が残つてゐる。石田茂作博士の調査によれば、間口五間、奥行四間の金堂址で、その南の池に近く塔址も推定せられ、金堂址の北には講堂もあつたらしく、四天王寺式の伽藍が建つてゐたと思はれる。そこには古瓦も出土する。飛鳥時代の單瓣蓮華文のものから、天平、鎌倉、室町の各期のものが出る。平安期のものゝ出土しないのは、その時代にはあまり盛大でなかつたらしい。こゝから現在のところに移されたのは、或は永正の頃といひ、或は天文年中とされ、また福山敏男博士は義淵准后日記によつて慶長年間であつたとされるが、寺では元祿のことであると傳へてゐる。後奈良天皇の御代あたりには、伏見宮の王女の御入室があ

り、爾來王女、皇女の御所となつたので、室町末には移轉も行はれ、江戸期に入つては桂昌院の寄進も加へられて現在のやうになつたものであらう。

中宮寺の草創は詳かでない。古くから所傳に異説あり、また近時學者の種々な所論もあるやうである。聖德太子の御母で、用明天皇の皇后であらせられる穴穂部間人皇女の宮居のあとを、皇后の御願によつて寺となし給うた。後世は皇后を中宮と申し上げたが、古くは太皇太后、皇太后、皇后の三宮を中宮と申し上げたので、この寺も間人皇女のちなみによつて中宮寺と稱へられたといはれる。とにかくその創建の年代は明かでないが、飛鳥期の古瓦の出土から、太子御在世の時あたりに創立せられたことだけ判明する。平安時代になると、寺運振はず、衰微してゐたやうである。鎌倉時代もその中頃、文永年間のことであつたが、河内國西琳寺の日淨や、西大寺の叡尊(興正菩薩)の力によつて、興福寺の慈性院の尼僧信如が再興したのであつた。この時代には三重塔も建ち金堂には如意輪觀音像を安置し、講堂には藥師如來像、その背後に天壽國曼荼羅繡帳をかけてゐた。

信如はまた覺盛(大悲菩薩)の門に在つた律尼であつたので、いまま唐招提寺に行はれてゐる梵網會を當寺で勤修してゐた。室町末には寺地の移轉もあり、皇室からの御入室もあつて、門跡尼寺となり、現在に及んでゐる。觸尼寺、比丘尼法興寺、中寺などとも呼ばれたやうである。いまは眞言宗で、泉涌寺派に屬してゐる。ともあれ聖德太子建立七寺の一として、斑鳩の地に千三百年の間の法統を傳へて、太子御遺蹟の眞中にあることを思へば、法隆寺に參詣するものゝ必ずおとなふべき寺院である。

二、本尊如意輪觀世音像

普通に佛像といへば、佛が大菩提を得、正法輪を轉じ、大神通を現じて外道を降伏せしめ、以大佛事を作事せんがために獅子座に坐して結跏する一つまり坐像を思ふであらう。また菩薩の姿はこの坐し給ふ佛に脇侍として直立する立像が一般である。ところが、いま靜かにこの中宮寺の本堂に坐し、ひれ伏して厨子に安置された本尊を禮拜したとき、そのお姿は榻に倚坐される形相を仰ぐのである。厨子の扉は開かれて、堂内のゆるやかな光りが、掲げられた帳の中にお像をほんのりと浮べてゐる。右足を左の膝にあげ、左手でそれを支へ、左足は踏み下げて榻に腰をおろされる。これを半跏像といふ。半跏とは我々が座敷であぐらを組む形をいつたもので、禪道場で坐禪するときのやうな結跏趺坐の全跏に對する坐相をいふのであるが、美術史家は本像のやうな倚像の片足を

踏み下したものを半跏形と呼びならはしてゐる。そして本像の右手は右足に肘をついて、掌を上にあげ、五本の指は右頬のあたりに自然の姿をみせてゐる。これを思惟形と呼ぶ。つまりこの菩薩は半跏思惟像なのである。このやうな形相のものは、我國に於ては飛鳥期から白鳳期にかけて多く、御物の四十八體佛や野中寺、廣隆寺、岡寺、神野寺等にある菩薩像に見うけられる。野中寺像にはその座縁に『彌勒御像也』と鐫刻されてあるのみならず、廣隆寺のものには同寺の資材校替實錄帳に『金色彌勒菩薩像』とあるために、この半跏思惟の形相は彌勒菩薩像であると論ぜられて、この中宮寺の本像をも彌勒菩薩と美術史家は呼んでゐる。當寺では如意輪觀音としてこの本堂にまつられ、國寶にも如意輪觀音として指定されてゐる。勿論、如意輪觀音といふものは、支那には唐の則天武后の頃に漢譯された『觀世音菩薩秘密藏如意輪陀羅尼神呪經』が最初のもので、我國では文武天皇の御代のことであつた。

譯經早々我が國に渡來したとしても、白鳳末期か、天平初期のことであつて、飛鳥期の菩薩像が如意輪觀音像として造像されたことはあり得ない。美術史家の信仰は別とした觀察は正しいかも知れない。しかしこの半跏思惟像は朝鮮にもあり、支那、西域、印度にも數多く現存するもので『樹下靜觀』として佛傳に見うけるのである。必ずしも彌勒像に限つたものではないらしい。その造顯

當初は如何ともあれ、この中宮寺では如意輪觀音像として禮拜された傳統がある。また降つても平安初期には聖德太子を如意輪觀音の化現として信仰し、それが爾來千有餘年の間續いて今日に及んだ事實がある。太子ゆかりの當寺の本尊をことさら彌勒像と呼び直すことは、あまりにも斑鳩の地に千年の歴史を、又傳統を蹂躪したやうではなからうか。

厨子に近く進んで側面から本像を拜する。黒い艶の美しい樟の一本造り、素木のやうであるが、もとは漆箔であつた。その金箔押の痕跡が今も認められる。寶冠、寶劍、瓔珞の身莊嚴もあつた。金具のあとが残つてゐる。上半身は裸形で、腰から下には裳が兩足から榻にかけて軽く襲の目を流してゐる。その線の流れ——それは廣隆寺像に近く、百濟觀音や夢殿秘佛とは趣を異にしてゐるやうである。典雅にして濃艶な肌。腕と手。左右の肩には二つの丸い寶髻から垂髪が流れてゐる。流麗な曲線は拜する者をうつとりさせるであらう。『ほゝゑみてうつゝ心にありたゝす百濟觀音』とはまた違つた笑ひを口のあたりに拜するとき、中宮寺に參詣したことの歡びを深く感じないでは居られない。踏み下げた左足は長い莖の蓮華がうけてゐる。雄大な反花座。その背面には百濟觀音のやうに竹幹を模した支柱に寶珠形の光背を支へてゐる。光背は法隆寺金堂の藥師像のそのやうに、中央に蓮華、その周圍に唐草、火焰には七佛が坐してゐる。

優しい、なつかしいこの像は、聖女の像のやうだといつた人もある。佛の信仰を知らないもので、も慈悲の恵みにひたり得ると書いたものもある。

本像を禮拜して、初めて古美術にあこがれて、日本美術史に興味を持つやうになつた者も少くない。この寫眞を見て日本を知つた外人もあつた。この像こそ日本文化の眞髓を物語るやうである。清く、明らけく、しかも慈愛に満ちた本像は、飛鳥期でも末期か、或は次の白鳳期のもので、日本人の温い心の籠つたものである。

三、天壽國繡帳殘片

本尊如意輪觀世音半跏思惟像に驚いた吾々は、またこの堂の片隅に置かれた天壽國繡帳の殘片を拜觀して更に眼をみはるのである。

推古天皇三十年に聖德太子が薨去遊ばされた。王妃橘大女橘大女郎は悲嘆のあまり、勅許を得て太子の往生あらせられた天壽國の有様を二張の繡帳に現はさしめたのであつた。その製作には多くの女官達を當らしめられたが、畫は東漢末賢東漢末賢、高麗加西溢高麗加西溢、漢奴加已利漢奴加已利に描かしめ、棕部秦久麻棕部秦久麻に監督

させられたのであつた。その天壽國の繡帳が、たとへ殘片とはいへ、實にこれなのである。この中宮寺の外には法隆寺や東京帝室博物館、藤田男爵家にもほんの少しの斷片が現存するが、この殘片が最も大きいもので、他のものを見なくとも、これで繡帳の現状は理解することが出来るのである。先年正倉院からも少々發見されたが、これは中宮寺に御下賜になり、いまでは東京帝室博物館に出陳されてゐる。

この殘片は六片で、それを豎二尺九寸、横二尺七寸餘の一鋪に額装されてゐる。月、龜甲、菩薩、宮殿、草木、飛雲、人々などが紫羅、紫綾、白平絹の地質のものに、藍、赤、蘇芳、縹綠、萌黃、黒、白の絲で刺繡されたものである。いまは殘片であるが、もとの姿はどんなものであつたか。或は『大さ一丈六尺あり』とも、また或は『二丈許』ともいはれてゐて、原状は判明しない。それが二張の寸法か、または各張の大きさかも知られてゐない。現在の殘片だけではその圖様も詳かでないが、小野玄妙博士や石田茂作博士の研究による復原の推測も行はれてゐる。それによると、中央には天壽國の圖が示され、その左右と下部の三ヶ所の龜甲に四字づつ書き込まれたもの百個を連ねて縁起文が附加されてゐたやうである。いまこの殘片にもその龜甲が殘存してゐる。『部間人公』、『于時多至』、『皇前日啓』の三者は肉眼で判讀できるが、文字の明瞭でない他の一は最近原寸寫眞

によつて、『佛是真玩』と讀むことが出來た。正倉院發見のものには『利令者棕』、藤田男爵家のものには『天下生名』とある。それで合計二十四文字が現存することになるが、幸なことにはこの續帳の縁起文は上宮聖德法王帝説に全部載つてゐる。これにも問題のある部分もあるが、宮田俊彦氏と石田博士の研究によつて、その全文を左に掲げ、譯文を附け加へておく。

斯歸斯麻	宮治天下	天皇名阿	米久適意	斯波留支	比里爾波	乃彌已等
娶巷奇大	臣名伊奈	米足尼像	名吉多斯	比彌乃彌	已等爲大	后生名多
至波奈等	已比乃彌	已等妹名	等已彌居	加斯支移	比彌乃彌	已等復娶
大后弟名	乎阿尼乃	彌已等爲	后生名孔	部間人公	主斯歸斯	麻天皇之
子名薩奈	久羅乃布	等多麻斯	岐乃彌已	等娶庶妹	名等已彌	居加斯支
移比彌乃	彌已等爲	大后坐乎	沙多宮治	天下生名	尾治王多	至波奈等
已比乃彌	已等娶庶	妹名好部	間人公主	爲大后坐	濱邊宮治	天下生名
等已刀彌	彌乃彌已	等娶尾治	王之女名	多至波奈	大女郎爲	后歲在辛
廿一日癸	酉日入孔	部間人母	王崩明年	二月廿二	日甲戌夜	半太子崩

(以上二百字)

于時多至	波奈大女	郎悲哀嘆	息白畏天	皇前日啓	之雖恐懷	心難止使
我大王與	母王如期	從遊痛酷	无比我大	王所告世	間虛假唯	佛是真玩
味其法謂	我大王應	生於天壽	國之中而	彼國之形	眼所匡看	怖因圖像
欲親大王	往生之狀	天皇聞之	悽然告曰	有一我子	所啓誠以	爲然勅諸
采女等造	繡帷二帳	畫者東漢	末賢高麗	加西溢又	漢奴加已	利令者棕
部秦久麻						以上二百字

【譯文】 斯歸斯麻の宮に天下を治しめす(天皇名は阿米久爾意斯波留支比里爾波乃彌已等)巷奇大臣(名は伊奈米是尼)の女(名は吉多斯比彌乃彌已等)を娶して大后となし、名は多至波奈等已比乃彌已等、妹名は等已彌居加斯支移比彌乃彌已等を生れます、復大后の弟(名は乎阿尼乃彌已等)を娶して后となし、名孔部間人公主を生れます、斯歸斯麻天皇之子(名は薩奈久羅乃布等多麻斯支乃彌已等)庶妹(名は等已彌居加斯支移比彌乃彌已等)を娶して大后と爲し、乎沙多宮に坐して天下を治しめし、名尾治王を生れます、多至波奈等已比乃彌已等、庶妹(名は孔部間人公主)を娶して大后と爲し、濱邊宮に坐し天下を治しめして、名等已刀彌彌乃彌已等を生れまし、尾治王之女(名は多至波奈大女郎)を娶して后と爲したまふ、歳の辛己に在る十二月廿一日癸酉の日入るときに、孔部間人母王崩ましぬ、明年の二月廿二日甲戌の夜半に太子崩たまひぬ。時に多至波奈大女郎悲哀嘆息、天皇の前に畏白して曰く、之を啓すは恐ありと雖心に懷ひて止便難し、我大王は母王と期

し如く從遊かみりまして痛醒いたしきこと比无たひなし、我が大王おほきみ所告まをひけらく、世間は虚假ごけにして唯ただ佛のみ眞まことなりと、其の法みちを玩味するに我大王は天壽國之中に應生おんせいつらんとぞ謂ふ、而るに彼の國之形は眼まなこに看みむ所なり、怖おそくば圖像に因り大王往生したまひき之狀を親みんと欲ふと、天皇之を聞しめして悽然せいぜんたまひて告曰のたまはく、一の我子わがこ有り、啓まをす所誠まことに以て然しかか爲ふとのたまひ、諸采女もろのうはな等に勅あづかりして、繡帷きゆうゐ二帳ふたぢやうを造つくらせたまふ、畫えける者は東漢末賢とうまんとけん、高麗加西溢こうらいかさいえき、又漢奴加己利あむのむかごり、令者あまは掠都秦らくとせ久麻くまなり

これは前後兩段に分けられる。前半は御系譜であり、後半はこの繡帳製作の由來である。この全文四百文字を二張に、即ち各、二百字づつ、しかも龜甲に四字づつ入れて、通計百個の龜甲で組立てられてゐたのである。一張は羅、一張は綾、その地質を異にしてゐたとの推測も行はれてゐる。

密教の渡來と共に曼荼羅の將來されるやうになつてから、この繡帳を天壽國曼荼羅と呼ばれるやうになつた。その製作については縁起文が物語る通りであるが、中央の天壽國の部分は推古天皇の御代に出來たであらうが、龜甲の縁起文の部分は或は皇極天皇二年以後に附加されたものではなからうかとの説がある。この四百字の文章は非常に多くの假名が使用されてあつて、固有名詞は殆ど全部が假名書きである。これは法隆寺金堂の藥師像や釋迦像等の銘文よりも時代の降るものと考へられ、しかも全體の内容は大女郎を中心としたものであるから、或はその薨去、即ち皇極天皇二年

以後に大女郎を追悼するために製作せられたものではなからうかといふのである。法王帝説にもすでに記載されて居り、中央天壽國の畫かれた部分より降るとするも、我國最古の文献の一つであることには誤りはないであらう。

x

聖德太子が薨後往生あらせられた天壽國とは如何なる淨土であらうか。これはその時代の佛教信仰の内容を物語るもので、興味深い問題である。それで學者は種々論説した。けれども何分當時の資料とてなく、未だ定説をみない。法王帝説には『猶云、天耳』と註してゐるし、鎌倉時代には定圓が『無量壽國』だと書いてゐる。或は彌勒淨土の兜率天と論じ、或は彌陀の淨土と説き、または個性なき淨土であるなどといふ。『天』は『无』で、無壽國又は無量壽國の誤脱だとする説もある。とに角この『天壽國』はこの繡帳を解説するばかりでなく、我上代佛教を究明する大きな鍵である。輕々に論斷されべきではないであらう。

已資紙規第二三四號東京府規格外許可

昭和十六年八月三十日印刷
昭和十六年九月五日發行

大和路 (法隆寺)

編纂者 新井和臣

大阪市天王寺區上本町六丁目一番地
関西急行鐵道株式會社

發行者 久保常明

大阪市天王寺區上本町六丁目一番地
関西急行鐵道株式會社

印刷者 大橋松雄

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百八番地

大阪市天王寺區上本町六丁目一番地
関西急行鐵道株式會社内

發行所 近畿觀光會

不許
複製

410
51

終

大和路